

市民社会をつくる
ボランティアフォーラム
TOKYO 2021



2021年

2月12日(金) 13日(土) 14日(日)

飯田橋セントラルプラザ及び
オンラインで開催

3日間にわたり、様々な社会問題に焦点を当てた20の分科会を開催します。

主催：東京ボランティア・市民活動センター

企画運営：市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2021実行委員会

後援：東京都、特定非営利活動法人日本NPOセンター

特別協賛：株式会社ガイア、株式会社三菱UFJ銀行

協賛：NECネットエスアイ株式会社、NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド
公益財団法人SOMPO環境財団、公益財団法人SOMPO福祉財団
公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団
社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団、東京都生活協同組合連合会
トヨタ自動車株式会社

協力：社会福祉法人清水基金、生活協同組合パルシステム東京、中央労働金庫
モンデリーズ・ジャパン株式会社

事業協力：TOOS CORPORATION

(五十音順)

参加費

1分科会：1,000円

申込方法

ホームページをご覧ください。

フォーラムホームページ
<https://tvac.or.jp/vf/>

ボランティアフォーラム 検索



詳細・申し込みはコチラ!!

お問い合わせ

東京ボランティア・市民活動センター

TEL: 03-3235-1171

FAX: 03-3235-0050

フォーラムFacebook「市民社会をつくるボランティアフォーラムtokyo」

フォーラムTwitter「ボランティアフォーラム」

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんていあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2021」（以下、「Vフォーラム」）では、「つながるチカラ 新しいカタチ」をテーマに、21 分科会、2 特別企画を実施し、参加者、登壇者、ボランティア、実行委員、スタッフを合わせのべ 673 名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えなかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題が掲載されています。また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが自分らしく生きることができる豊かな社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに

第1章 企画編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2021 ができるまで	2
--------------------------------------	---

第2章 実施編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2021 開催概要	6
各プログラム実施報告	
01 自治体のお財布事情を知って、協働に活かす	8
02 バリアフリープロレス HERO の取り組みから ～誰もが生き生きできる空間づくり～	10
03 お隣の外国人のこと、知っていますか？ ～日本の制度から考える多文化共生～	12
04 コロナ禍から考える、災害ボランティアと外部支援者の役割	14
05 子育て支援の変化とは ～新たなふれあいの模索～	16
06 ワカモノの声を聴く！若者を取り巻く“いま”を知る	18
07 災害大国日本、地域の力を結集！	20
08 急増する孤独死は人ごとではない！ ～年間3万人その現状とは～Part2	22
09 感じる福祉教育の“ひと工夫”を考えよう！	24
10 コロナ禍での居場所づくりの現在地 ～高齢者の交流の場を対象に～	26
11 コロナ禍における地域イベントオンライン化の実状	28
12 オンラインでのつながりづくりを考える ～コロナでの経験から～	30
13 身近なところから、身近なところで考える、SDGs。	32
14 オンラインカフェ「新しいカタチ」	34
15 居心地のいい社会に向けて、政治も動かす共感力	36
16 LINE でできる地域活性化 ～自動応答サービス（LINE Bot）を活用して、はじめの一步を踏み出そう！～	38
17 障害を持つということ ～ヒューマンライブラリーの手法で学ぶ～	40
18 ボランティアと有償活動を知る	42
19 新しいボランティアのカタチ ～活動の輪を広げる～	44
20 コロナに負けない！ ～これからの助成と活動のカタチ～	46
21 クロージング つながる力	48
22 ふれあい満点市場～NPO・NGO の作品展示販売～	50
23 情報誌『ネットワーク』表紙原画展	52
（参考）市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 開催状況	54
実行委員会名簿	55
協賛・協力	56
ボランティアでご協力いただいたみなさま	57

<第 1 章>

企 画 編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2021 ができるまで

ボランティアフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO（以下、「V フォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして 2004 年から始まり、今年で 17 回目となりました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員のそれぞれの一歩につながることを目的としています。

実行委員会について

V フォーラムの今年度の方向性を検討するために、まず準備会を開催しました。準備会は、長年 V フォーラムに関わっている少数のメンバーで構成され、これまでの V フォーラムを振り返るとともに、今年度の方向性や運営、実行委員会のあり方などについて話し合いました。

また、今年度は、コロナ禍での開催ということもあり、開催の可否、対応についても協議を重ね、例年 3 回のところ、今年度は 5 回開催しました。



第 1 回実行委員会の様子。
今年度は、Zoom によるオンラインでの開催だった。

実行委員会は、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーで立ち上げ、取り組んでみたい社会問題についてのグループワーク、テーマ決め、分科会に関する話し合いを行いました。実行委員会は、振り返りの回を含め、10 回開催しました。

第 1 回の実行委員会では、実行委員がボランティア・市民活動の中で感じている、今気になること・共有したい社会課題を、キーワードとして出しました。その後、出したキーワードをグループディスカッションでより深め、それをもとに各自で分科会企画案を作成しました。

その後、数回の実行委員会のなかで、各分科会の内容については何度も話し合いを重ねました。企画者の考えだけでなく、他の実行委員のさまざまな意見を加えていくことで、よりブラッシュアップされた分科会ができあがっていきます。こうした分科会の企画を進めると同時に、V フォーラム全体に関わる運営については、「部会」で話し合いを進めました。

今年度の部会は、Facebook の活用や PR 動画を作成する「広報部会」、クロージングの企画を行う「全体会部会」、アンケートの活用やファンレイジングに関する検討を行う「マーケティング部会」、参加者同士の交流の場であるカフェや実行委員間の交流会を企画する「交流会部会」の 4 つの部会を設けました。

アンケートでは、回答者 117 名のうち、75 名の方が「初めて参加した」と回答しており、V フォーラムが広く認知されてきていることが示されました。また、オンラインの活用については、これまで参加が難しかった遠方の方も参加できるようになるなど良い面がある一方、「オンラインではグループディスカッションが難しかった」「音割れが気になった」とオンラインならではの課題も見つかりました。来年度はよりよい分科会を作っていけるよう実行委員会で検討していきたいと思います。

V フォーラムでは、参加者のみなさんの声や想いを大切に、誰でも参加でき、市民活動・市民社会を考える機会にしたいと分科会を企画してきました。今年度のテーマは、「つながるチカラ 新しいカタチ」。コロナ禍で新たな分断が生まれましたが、誰一人取り残すことなく、多様な人となつながりを持ち、新しいカタチを創造してゆくのだという想いが込められています。

分科会企画案の公募

これまでの V フォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマで分科会を企画することをねらいとして、分科会企画案を公募しています。分科会企画案の公募が採用された場合も、案をそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきます。また、他の分科会についても共に内容を検討し、V フォーラム全体の運営にも関わります。

<第 2 章>

実 施 編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2021

開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会問題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004 年から開催しています。企画運営は実行委員会形式で、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動に関わるメンバーで組織しています。毎年、参画した実行委員同士で問題意識を持ち寄り、協議を重ね、いま取り組みたい社会課題などを発信しています。

今年度は新型コロナウイルスの拡大に伴い、フォーラム当日もオンラインを併用しながら取り組むことに決めました。いままでとは勝手が違い戸惑いはありますが、多くの方が安心して参加できるための新たな挑戦をします。

また、今年のテーマは「つながるチカラ 新しいカタチ」。コロナ禍で新たな分断が生まれましたが、誰一人取り残すことなく、多様な人とつながりを持ち、新しいカタチを創造してゆくのだという思いがこのテーマに込められています。

参加者のみなさんの声や想いを大切に、このフォーラムを誰でも参加できる市民活動・市民社会を考える機会にしたいと思います。

開催概要

テ ー マ	つながるチカラ 新しいカタチ
開 催 期 日	2021 年 2 月 12 日（金）19：00～21：00 2 月 13 日（土）10：00～20：00 2 月 14 日（日）10：00～18：00
会 場	飯田橋セントラルプラザ及びオンライン
主 催	東京ボランティア・市民活動センター
企 画 運 営	市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2021 実行委員会
後 援	東京都、日本 NPO センター
参 加 費	1 分科会 1,000 円 高校生以下、または 18 歳未満の方 無料

申込参加者のべ数 **484 名**

出演者 56 名

実行委員・運営スタッフ・ボランティアのべ 133 名

参加者のべ数 **673 名**

スケジュールと会場

日	時間	会場	分科会
2月12日(金)	19:00~21:00	12 階 AB 会議室	1 自治体のお財布事情を知って、協働に活かす
		12 階 CD 会議室	2 バリアフリープロレス HERO の取り組みから ～誰もが生き生きできる空間づくり～
		10 階 AB 会議室	3 お隣の外国人のこと、知っていますか？ ～日本の制度から考える多文化共生～
2月13日(土)	10:00~12:00	12 階 AB 会議室	4 コロナ禍から考える、災害ボランティアと外部支援者の役割
		12 階 CD 会議室	5 子育て支援の変化とは ～新たなふれあいの模索～
		10 階 AB 会議室	6 ワカモノの声を聴く！若者を取り巻く“いま”を知る
	13:30~15:30	12 階 AB 会議室	7 災害大国日本、地域の力を結集！
		12 階 CD 会議室	8 急増する孤独死は人ごとではない！ ～年間 3 万人その現状とは～Part2
		10 階 AB 会議室	9 感じる福祉教育の“ひと工夫”を考えよう！
	14:00~16:30	12 階 AB 会議室	10 コロナ禍での居場所づくりの現在地 ～高齢者の交流の場を対象に～
		12 階 CD 会議室	11 コロナ禍における地域イベントオンライン化の実状
		10 階 A 会議室	12 オンラインでのつながりづくりを考える ～コロナでの経験から～
		10 階 B 会議室	13 身近なところから、身近なところで考える、SDGs。
	17:00~18:30	12 階 A~D 会議室	14 オンラインカフェ「新しいカタチ」（参加費無料）
2月14日(日)	10:00~12:00	12 階 AB 会議室	15 居心地のいい社会に向けて、政治も動かす共感力
		12 階 CD 会議室	16 LINE でできる地域活性化 ～自動応答サービス（LINE Bot）を活用して、はじめの一步を踏み出そう！～
		10 階 B 会議室	17 障害を持つということ ～ヒューマンライブラリーの手法で学ぶ～
	13:30~15:30	12 階 AB 会議室	18 ボランティアと有償活動を知る
		10 階 A 会議室	19 新しいボランティアのカタチ ～活動の輪を広げる～
		10 階 B 会議室	20 コロナに負けない！ ～これからの助成と活動のカタチ～
	16:30~18:00	12 階 A~D 会議室	21 クロージング つながる力（参加費無料）
2月13日(土)、14日(日) 11:00~15:00		1 階区境ホール	22 ふれあい満点市場 ～NPO・NGO の作品展示販売～
開催期間中いつでも		10 階フリースペース	23 情報誌『ネットワーク』表紙原画展

No.1 自治体のお財布事情を知って、協働に活かす

開催目的

どこも同じように見える自治体の財政ですが、実態は雲泥の差があります。人口や規模だけでなく、各市区町村がどのように自治体運営をしてきたかによって、お財布事情は大きく異なります。さらに、新型コロナウイルスによって、自治体の収入が悪化し、予算が縮小していく懸念も。

ここでは、自治体の財政状況を読み解く方法を知り、市民活動の協働提案に活かします。

開催日時・方法

2月12日（金）19：00～21：00（オンライン参加のみ）

参加者数

25名（参加者15名、出演者1名、スタッフ9名）

出演者

早坂 敏文さん（朝日新聞ジャーナリスト学校）

＜プロフィール＞

1982年朝日新聞社入社。盛岡、水戸の各総局で県政を取材。本社では会計検査院、旧厚生省、警視庁などを担当し、社会部、地域報道部でデスク。現朝日新聞ジャーナリスト学校ディレクター。社内外で、自治体財政の研修を担当。

内容・成果・課題

●問題意識

自治体財政は、市民の暮らしに直結する重要なものです。しかし、特有の言葉の使い方や、どのように見るのかという解説がないと、把握・理解していくことは困難です。市民協働がひろがっていかなく、自治体財政に触れる機会も多くなっています。自治体の財政状況を知ることが、よりよい協働の関係づくりにつながっていくことを期待して、今回の分科会を企画しました。

この分科会では、まずは自治体財政を知るうえでのコツや基本的なことを学びました。

●分科会のトピック

- ・まちのサイフはいくつ？（一般会計と特別会計について）
- ・どこにどんな資料？（総務省 地方財政状況調査関係資料・決算カードについて）
- ・決算カードのチェックポイント
- ・コロナでどうなる、どうする

●ポイントとなったこと

1) 変化してきた自治体財政

この20年で自治体財政は大きく変化してきました。特に義務的経費は増加の一途をたどっています。義務的経費とは、任意に削減できない硬直性が強い経費で、職員の給与等の人件費、児童・高齢者・障害者・生活困窮者への支援に要する経費、公債費です。各自治体で、義務的経費の割合が変化をしているのかを見ていき、財政構造が変化したことを理解することが大切となります。

2) 自治体財政を見るための資料

自治体の財政破綻が大きなニュースとなり、その後、国が主導して「自治体財政の見える化」に取り組んでいます。地方財政状況調査関係資料は、総務省のウェブサイトで確認することができます。特に重要な視点としては、タテ軸とヨコ軸で比較していくことです。タテ軸とは、過去にさかのぼって、財

政状況を比較することです。ヨコ軸とは、同じぐらいの規模の自治体と比較をしてみることです。そうすることによって、自分たちの自治体が置かれている状況を理解することができます。

3) 新型コロナウイルスの影響

新型コロナウイルスの感染拡大や外出自粛によって、景気が悪化し、企業の業績は厳しい状況となっています。それに伴い、自治体の税収が減少していくことが想定されます。すでに、自治体との委託費や指定管理予算の削減や見直しを求められているNPOもあるでしょう。

義務的経費が増加しているなか、見直しをしていくことも必要です。しかし、人々の暮らしをまもるための経費も、一律的に削減することと一緒にしてはいけません。まさに、各自治体の政策力が問われます。私たち市民への情報開示や、市民による監視が重要となってきます。



●まとめ

情報開示が進むなか、市民自身も自治体財政を理解する機会は増えています。一方で、小難しい言葉が多く、把握をするための解説などが不足していることも事実です。

自治体財政が変化していくなか、すべて行政が負担することもできない状況になっています。財政的な側面から市民活動への期待も増えるなか、市民自身も自治体財政を理解することで、より対等な関係づくりができるのではと考えます。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・改めて自治体財政に関するお話を聞いたのが初めてで、どのお話もとても参考になりました！自分なりに分析していくには時間がかかりそうですが、「決算カードを知る」ことがまず大事だと思います。今度時間を見て過去10年分のデータを探してみたいと思います。
- ・予備知識が足りない私でも講師のお話がわかりやすかったです。Zoomでの参加だったため、並行して総務省のサイト等を見ることができたのも良かったです。自分の市について同時進行でデータを見ることができて、速攻で教わったことを実行できました。新聞の記事で例を示してくださったのも大変わかりやすかったです。
- ・講師の方のさまざまな視点からお話をしてくださった（記者・市民・国・自治体）ことも全体像を把握しやすい点でした。
- ・自治体の財政状況の見方がわかって、面白かった。協働に進めるには、知ったうえで「どうする？」の議論が必要だったかなあと感じました。

企画・運営

上田 英司（日本NPOセンター）【主担当・報告書】

山田 翔太（一般財団法人世田谷トラストまちづくり）

No.2 バリアフリープロレス HERO の取り組みから ～誰もが生き生きできる空間づくり～

開催目的

「誰もがプロレスを楽しむ空間を作りたい」を合言葉に、バリアフリープロレスとしてさまざまな垣根を取り除く《夢の空間づくり》を目指しているプロレス団体の取り組みを紹介します。イベントを実施する際の障がい者の方々に寄り添うシステムづくりのヒントになる内容です。

開催日時・方法

2月12日(金) 19:00～21:00 (オンライン参加のみ)

参加者数

24名(参加者16名、出演者4名、スタッフ4名)

出演者

豊島 修二さん(GPSプロモーショングループ 会長)

佐藤 剛由さん(NPO法人バリアフリーエンターテインメントサポート 理事長)

友龍さん(バリアフリープロレス HERO 所属選手〈デフレスラー〉)



内容・成果・課題

【この団体が始まった背景】

もともとはプロレスラーを目指していたヤミキ選手(ゲストの佐藤さんのお父さん)の熱い思いから始まりました。聴覚障がい者同士が闘うアマチュアのプロレス団体に協力をしていたことから発展して、ヤミキさんが「デフレスラーが所属する世界初のプロレス団体」としてスタートしました。

〈支援者という立場からの参加〉豊島 修二さん

豊島さんは、この団体の活動についてクラウドファンディングを募る SNS から知り、最初は冷やかし半分の気持ちで話を聞いたのですが、佐藤さんたちの夢ある世界に魅せられて、是非協力をしていこうと思いました。いじめに遭っていた自分自身の子どもの頃の辛い思い出を乗り越えるきっかけはプロレスであり、大変憧れもありました。そこに携わることでいろいろな世界を知れました。

〈レスラーとして〉友龍さん

高校生の時に全日本プロレスの天龍源一郎選手に憧れて、プロレスの世界で頑張りたいと思いました。長年思い描いていたプロレスラーとして40歳代でデビューし、ついに夢を叶えることができました。

【世界にひとつしかないバリアフリープロレス団体】

〈障がい者の人たち向けのイベントは楽しくないものが多かった〉佐藤さん

両親が聴覚障がい、障がい者向けのイベントに自分も参加していましたが、家族として参加していても内容が今ひとつつまらなく思えて、障がい者の方々が本当に楽しめているのか？と疑問に思っていました。プロレス団体を興すには大変な苦労を伴うことを理解していましたが、「障がい者の方々にも刺激的な体験をしてほしい」との思いも強く、父の願いでもあったデフレスラーが活躍する団体を始めることができました。ヤミキファンの聴覚障がいの方も結構会場にいらしたので、その方々向けにさまざまな工夫をしました。聴覚以外の障がい者の方々からも問い合わせ、観戦希望が多くなり、



ここから幅を広げバリアフリーエンターテインメントという概念が誕生しました。

〈障がい者との交流で感じたこと・体感したこと〉 豊島さん

◆未知の世界

障がい者の方々からチケットの申し込みがあると、文章表現が独特で最初は戸惑い、文化の違いが理解できずに不躰だと思ってしまいました。その中から少しずつわかり合えるようになり障がい者の方々とのコミュニケーションの仕方が身についてきたと思います。

◆この団体だからこそ見える光景

聴覚障がいの方の座席は自由で、さまざまなところに座っています。試合観戦していた一般の方が興奮して思わず隣の人に話しかけたら、聞こえないのがわかりメモ用紙で筆談を始めて、そこからのSNSでの交流が今でも続いています。

聴覚障がいの方が視覚障がいの方を会場内でサポートするのも時々見かけ、そんな素敵な連帯感があるようです。

◆障がい者割引の概念

HEROでは割引をしていません。普通の会社なら入場料の一部を運営会社が負担するだけで、実際に、会場で楽しむということにおいては一般の方との差が生まれています。その分のコストを、誰もが楽しめる工夫に置き換え、これがバリアをなくすことにつながっています。

このバリアフリープロレス団体 HERO は、障がい者が日常生活をする中で、さまざまな場面で遭遇するバリア（障壁）を少しでも和らぐべく、エンターテインメントとして誰もが楽しめる世界を目指している他に類を見ない興行形態を実施しています。佐藤さんの当事者目線を実行したことで新たなものが生まれてきているのが大きな特徴です。この分科会に参加した方からお手伝いをしたいと申し出もあり、ボランティア活動としても取り組みやすいものだと思います。今後の取り組みが楽しみです。

【課題】

誰もが楽しめる幅広く門戸を開いたエンターテインメントを目指している HERO は、運営をバリアフリーに寄せているため、赤字になりやすいことが目下の課題です。一方で「エンターテインメント」と「バリアフリー」の試みとして、今後、新機軸となる可能性を秘めていると思います。

「エンターテインメント×バリアフリー」の発展に関して、様々な可能性のあるなか、誰もが垣根なく一体になれる楽しい場の創出を、引き続きみんなで考える必要があると思いました。



豊島修二さん



佐藤剛由さん



友龍選手

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・昔は障がい者を公に出すべきではないという風習だった日本を少しでも変えていけるように活動してきたと伺い、自分もいろいろな差別をなくしていくためにも支援ができればいいなと思いました。
- ・みんなが楽しみを共有することでバリアフリーを体感し実現できるということをお話を通じて実感し、大変勉強になりました。
- ・知らない世界をのぞいてみようという興味をもち参加しました。

企画・運営

鈴木 正昭（りすこ〈おおた復興支援活動団体協議会〉）【主担当・報告書】

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ／トライポッド）【副担当】

枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

No.3 お隣の外国人のこと、知っていますか？ ～日本の制度から考える多文化共生～

開催目的

現在日本に住む外国人は、人口の約2%となり、人手不足の日本にとっては、大きな力となっています。コロナ禍で、社会福祉協議会が実施する「特例貸付」でも、地域にいかにより多くの外国人が生活しているか明らかになったところです。

このような状況の中、2018年の出入国管理法の改定により、在留資格に「特定技能」が新設されました。これは、深刻な人手不足の状況に対応するため、一定の専門性・技能を有し、即戦力となる外国人材を受け入れようとするものです。

しかしながら、この制度では、外国人の皆さんを単なる労働力としてしか見ておらず、生活者として捉えているように思われません。

そこで、この分科会では、日本の移民に対する政策を学んだ上で、外国人と日本人が、お互いにとってよりよく、地域で共に暮らしていくためのあり方について、考えました。

開催日時・方法

2月12日（金）19：00～21：00（オンライン参加のみ）

参加者数

33名（参加者24名、出演者3名、スタッフ6名）

出演者

高橋 恵介さん（株式会社グローバルトラストネットワークス 特定技能推進室 室長）

西尾 加朋さん（一般社団法人OCNet 理事）

渡戸 一郎さん（明星大学 名誉教授）

内容・成果・課題

1 内容

はじめに、渡戸さんより「お隣の外国人ってどんな人？」というテーマで、日本に住んでいる外国人についてお話いただきました。現在日本には約290万人の在留外国人がいます。1990年代から日系人・研修生・技能実習生などの移民が増えました。どのようにして日本で暮らすようになったのか、経緯はさまざまです。

日本に住んでいる外国人の中には、自分の意志で来た人ばかりではありません。親の移動についてきた子ども、政治的迫害により来ざるを得なかった人もいます。しかし、永住者、定住者、技能実習生など日本に住民として暮らす人も多くいます。

このように、多国籍化が進む日本で大きな問題になっているのが「人種差別」です。世界ではBlack Lives Matterが大きく取り上げられていますが、日本でも在日外国人に対しての「ヘイトスピーチ」や「ヘイトデモ」が未だに行われています。

次に、西尾さんより「外国人サポートの現場（地域での生活）」について、活動のエピソードとともに、日本人と外国人が「共に生きること」についてお話いただきました。

定住意識が薄い短期居住の外国人住民に対して、日本人はその地域の「住民」になることを求めます。日常生活でのゴミ出しのルールに従うことを強いる場面もあります。また、外国人だからといってみんなが英語を話せるわけでもありません。外国人というと英語や中国語が思い浮かびますが、日本に住む外国人で一番多いのは中国人、次いで韓国人なのです。言語を使って意思疎通ができないと心の壁にもなります。加えて、日本で暮らす子どもたちも多くの問題を抱えています。教育現場では、言葉がうまく話せないなどの理由でいじめが起きています。家庭内でも親との不仲、進学に際しての制度的な問題もあります。



私たち日本人は、外国人住民に対して大きな期待と思いこみ（偏見）をもっていると言えます。外国人住民が本当に必要としているのは、日本で暮らす上で必要な情報にアクセスできるサポートであり、歩み寄る姿勢ではないでしょうか。

そして、今回の大きなテーマでもある「技能実習生」「特定技能」の現状について、高橋さんからお話がありました。現在、日本の介護施設では、フィリピン人、ベトナム人、ブラジル人などの多くの外国人が活躍しています。「技能実習生」というと厳しい労働環境で体よく使われている、そんなネガティブなイメージを抱くことが少なくありません。しかし、現実では「外国人は日本人よりもアクティブで人気者」で「働く」ことへの意識が非常に高いそうです。

日本の介護現場は人手不足が深刻な問題となり外国人の雇用を決断する必要が出てきています。外国人の力を必要としている今だからこそ、彼らが働く環境を整える、日本で暮らす上での必要な情報にアクセスできるようサポートすることが必要なのではないのでしょうか。

さらに、渡戸さんより「日本の移民政策」についてのお話がありました。一言で言うと、短期のローテーションシステムであり、定住化・永住化を阻止する政策です。

なお、2012年「新しい在留管理」制度の施行により、外国人の住民化が制度上は実現しましたが、一方で非正規外国人が排除されている現実があります。また、2016年には「ヘイトスピーチ解消法」が制定されましたが、重要なのは国の政策を各自治体でどのように対応するか、企業での取り組みも重要になってきます。つまり、外国人にとって暮らしやすい社会の実現には、制度・政策と市民社会の両者からのアプローチが不可欠なのです。これから、共に暮らしていくために、外国人を自立した市民として位置付ける必要があります。

最後に、質疑応答の時間を設けました。特定技能の方への日本語支援、外国人住民への防災・犯罪教育、技能実習生の地域住民との交流などについて質問いただき、出演者が回答しました。

2 成果

「外国人を取り巻く諸問題を広く浅く網羅的に知ることができたのが、良かったです」と参加者からのアンケートにありました。日本における多国籍化、地域の中での外国人、技能実習生などとても濃い内容を2時間という短い時間の中ではありましたが、お話しいただき、共有することができました。

3 課題

新型コロナウイルス禍での、在留外国人を取り巻く問題については、詳しく触れることができませんでしたが、さまざまな課題があります。強制的に解雇されてしまう、希望通りの勤務日数で働くことができないなど、外国人というだけで、さまざまな不利益がふりかかっています。

コロナ禍において、私たちは国籍を超えて何ができるのか、今一度考える必要があるのではないのでしょうか。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・支援者、企業、アカデミックの三者からのお話だったので、切り口が違ってなるほどと思いました。
- ・現在の日本における外国人労働者の状況がわかり、良かったです。
- ・制度や外国人を取り巻く状況が学べました。

企画・運営

鹿住 貴之（認定NPO法人JUON〈樹恩〉NETWORK）【主担当】

村瀬 つむぎ（NPO法人グッド）【副担当】

村上 カヤ（東京ボランティア・市民活動センター）【報告書】



No.4 コロナ禍から考える、災害ボランティアと外部支援者の役割

開催目的

2020年7月の九州豪雨など、コロナ禍の状況で発生した自然災害では、被災地域の外から支援に入る災害ボランティア（外部支援者）について、感染拡大のリスクが指摘されるようになりました。本分科会では、外部支援者として多くの被災地で第一線で活躍しているゲストを招いて、直近の災害対応の実践についてお話しいただきます。その話を受けて、外部支援者となる場合と外部支援を受ける場合のそれぞれ異なる立場について、分科会参加者同士の議論を通じて、どのような取り組みをしなければならないのか、何ができるのかという考察を深めていきたいと思います。

開催日時・方法

2月13日（土）10：00～12：00（オンライン参加のみ）

参加者数

27名（参加者22名、出演者1名、スタッフ4名）

出演者

上島 安裕さん（一般社団法人ピースボート災害支援センター 理事・事務局長）

内容・成果・課題

1 上島さんのお話「支援の実践者としての取り組み紹介と課題提起」

東日本大震災も含め、多くの災害現場において陣頭指揮を取ってきた上島さんには、今回は特にコロナ禍において発生し、熊本県を中心に九州全般などに多くの被害をもたらした2020年7月豪雨災害での支援における具体的な取り組みをお話しただけではなく、そこからの学びや、平時における地域の備えや外部支援者が取り組むべきことなど、幅広いお話を伺うことができました。

コロナ禍に限らずピースボート災害支援センター（以下、PBV）では、突然の災害にも迅速に対応できるように平時よりボランティア人材の育成に努めてきました。コロナ禍における災害の発生は想定していましたが、慎重に準備と事前の調査や調整を行い、現地での支援を進めましたそうです。当初はコロナ感染拡大の懸念から外部からの支援を懸念する声も聞こえましたが、支援の必要性が長期化するにつれ、特に避難所や災害ボランティアセンターの運営などPBVの知見が必要とされてきました。PBVとしては、現地行政や社協からの要請を受け、支援者がコロナ感染に対するできる限りの対策を講じ、被災地の人々に安心して迎え入れてもらえるように取り組んできたとのことでした。

地球温暖化などの影響も受けて、災害の甚大化、頻発化、長期化などが顕著になってきている今、被災地域だけで対応しきれない災害が多く発生しています。地域だけで災害対応が完結できない事象が増えれば、外部からの支援の必要性は高くなります。コロナ禍のような「難しい課題」が突きつけられた時に、リスクを懸念するだけでなく、「どのように必要な支援を届けられるか」を模



提供：PBV/撮影：Social Good Photography, Inc.

索してきた PBV の姿勢はとても大切だと感じました。

2 グループディスカッション

1 グループ 3～4 名程度のグループに分かれて 2 回、以下のテーマで話し合いました。

(1) グループディスカッション 1「外部支援者としてできること」

コロナ禍において、感染防止に努めることは、被災者や支援者をまもることにつながるという意見が出ました。こうした時の対策をしっかりと取るために、支援団体やボランティアセンターの重要性にも言及がありました。また、個人レベルでは十分な対策を取ることが難しくても、募金などを通じて被災地を支援することは可能であるという意見も出ました。

(2) グループディスカッション 2「外部支援者を受け入れるためにできること」

まずは、外部支援の必要性について十分に認識することから始まり、平時から外部とのつながりを作っておくことの重要性について、多くの人から言及がありました。そのためにもこうしたフォーラムやさまざまな防災・災害対応の勉強会等に参加することが大切です。また、実際の災害対応においても外部の支援者にどのように活躍してもらうかを、地域の仕組みとして平時から考えておくことも大切です。

3 まとめ

地域の災害対応能力を強化する取り組みは当然ながら大切だと思う一方で、同時に、地域の対応能力を超えた災害の発生を想定して、外部からの支援を前提とした災害対応を考えることが、地球規模課題だけでなく、少子高齢化が進む日本において人的資源を活用するために、必須であると改めて強く感じました。一方でコロナ禍は、外部支援者がもたらす課題を顕著化しました。外部からの支援の必要性がますます高まるからこそ、PBV のように外部支援者自身が「被災地域からの必要性に応え、負の影響をもたらさない」責任を持たなければなりません。しかし、いくら責任ある外部支援者がいても、一朝一夕に被災地との信頼関係ができるわけではありません。外部支援者も、これを受け入れる地域自身も平時よりつながりを作り、いざという時の信頼関係を醸成しておくことが重要であると改めて感じました。そして、全国どこでも何らかの災害リスクがある日本においては、全ての地域と人々が支援の受け手にも、担い手にもなる可能性があると思いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・さまざまな参加者からの意見が聞けて、改めて災害ボランティアへ行く・来てもらうことの意義を感じた。また、支援する側も受ける側も準備しておくことや、気遣う気持ちがあり、成り立っていくものだと感じた。
- ・上島さんの「ちゃんとやればできる」という言葉の想い・覚悟・責任に打たれました。また、やれることを探す、コーディネートが必須、情報共有、平時からが大切などなど、2 回のセッションを行っていただいたことで深めることができました。

企画・運営

五十嵐 豪（特定非営利活動法人 CWS Japan）【主担当】【報告書】

神元 幸津江（認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）

No.5 子育て支援の変化とは～新たなふれあいの模索～

開催目的

with コロナの中、行動制限やコミュニケーションが取りづらい状況になり、子育て支援の活動においても新たな課題が発生しています。課題に対する対応方法を検討し、できることから実行している事例を発表していただき、本分科会で得た情報、知見、アイデア（必要としている支援、サービス形態）を基にこれからの支援活動の発展につなげていきます。

開催日時・方法

2月13日（土）10：00～12：00（オンライン&会場参加）

参加者数

28名（参加者20名：うちオンライン19名 会場1名、出演者3名、スタッフ5名）

出演者

幾島 博子さん（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち 代表理事）
駒崎 圭子さん（親子のあそび場「つくくいた」 代表）
三瓶 七重さん（NPO 法人砧・多摩川あそび村「きぬたまの家」 施設長）

内容・成果・課題

1 内容

（1）駒崎圭子さんより事例紹介

室内&野外を融合させている子育てひろば（「にじっこ」「つくくいた」）、およびオンラインでの子育てメッセをテーマに30分間ご講演いただきました。

駒崎さんからは、まず、親子のあそび場「つくくいた」や「にじっこ」における2019年度と2020年度の活動について写真を用いて比較しながらお話しいただき、密に集まったり遊んだりできない、一緒に食事ができない、外出するのに迷いや気遣いを考えてしまうといった切実な苦労や悩みのお話がありました。しかし、コロナ禍だからこそ活動自体は止めたくないという思いから、室内や道遊びを併用しながら今まで通りに来たいときに来られる環境づくり、開催時間の変更（お昼ご飯を避けるために午後から夕方に実施）、開催側や利用側の不安を話したりしてできる限り不安を低減できるようにするなどの工夫を行いながら、親子の広場を再開していったお話がありました。

次に、日々の子育ては止まらないことから子育てメッセの必要性を感じ、子育てメッセをオンラインで開催しましたが、オンラインでの開催経験がないため、開催するにあたり、多くの方々のご協力を得て、開催することができたというお話がありました。また、会場に足を運んでいるかのように会場と各家庭で双方向のやり取りができるように取り組み、イベント当日だけではなくその後も街や地域と子育てが繋がっていく工夫を行いながら、オンラインでの子育てメッセを実施することができ、新たな子育て支援の形を具現化することができたというお話がありました。

（2）三瓶七重さんより事例紹介

NPO 法人砧・多摩川あそび村の活動（きぬたまあそび村：河川敷を拠点としたあそび場事業、おでかけひろば きぬたまの家：子育て支援拠点、利用者支援事業：きぬたまの家の一室にて地域子育て支援事業、ちびたまあそび村：プレーリヤカー事業）をテーマに30分間ご講演いただきました。三瓶さんからは、外遊びにおけるコロナ禍での変化は、食事を禁止せざるを得ない状況になりましたが、基本的にはダイナミックに外遊びを行うことができ、さらに親子で身近な自然で遊ぶという機会が増え、いいきっかけになっているというお話がありました。また、きぬたまの家では近隣の方々や近隣農家と提携し、近隣の方々とスタッフが顔の見える関係を作り、利用者にとっても安心できる子育て支援の拠点

として活動を行っていました。コロナ禍ではオンラインやインスタを活用し、活動を発信し続け、室内と外遊びを併用しながら活動を行っていたお話がありました。

(3) 質疑応答

出演者のお話を受けて、内容の深掘りや理解を深めるために、質疑応答の時間を設けました。「スタッフのやり取りで苦労されていることはありますか？」という質問に対して、「行きたくても行けないスタッフがいるため、運営方法を変えて対応していました。例えば、活動の記録写真を撮らないようになったことや利用者親子にも協力してもらっていること。また、スタッフだけの苦労にするのではなく、利用者にも苦労を共有してもらっています」というお話がありました。他の質問としては、「不安な気持ちのお母さんたちに来てもらうきっかけはどのようにしていますか？」があり、それに対しては「インターネットやインスタで情報を配信して、安心できる場所だと発信し続けています」というお話がありました。

2 成果と課題

コロナ禍での子育て支援活動、親子の広場活動を止めざるを得ない状況になっている中で、どうしたらできるといった事例を共有することで、新たな一歩を踏み出すきっかけにできたと考えています。そして、オンラインでの発信や利便性を活用しながらも、対面で人と人がつながって子育てをしていくことの大切さを再認識でき、さらに柔軟に考え続けていくことの意義を学ぶことができました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・コロナ禍で子育て中の親、子育ての活動がどのような状況にあるのか、また感染リスクの中でなおさらこうした活動の場が求められていることを知ることができました。また、緊急事態宣言中、活動はやめても扉は閉めずに開けていて、「ここにいるよ」のサインを送り続けていたこと、つながりを絶やさない心意気、工夫を感じました。
- ・コロナ禍でも、子どもたちに関われる、地域で交流できる、またやっていけることがわかりました。地域での子育て、子育て、親と親との関係、シニアの方々との関係をつくっていける希望が持てました。怖がらずに一歩踏み出したいと思いました。
- ・大大大満足です。素晴らしい分科会でした。企画してくださり、ありがとうございます。今まで「会う」「話す」「触れる」を大切にしてきたので、このコロナ禍、悩みの1年でした。できない・やらないではなく、どうすればできるのかを工夫し活動を継続しているの方々のお話に元気をいただきました。また、ファシリテーターの幾島さんからは大切なことは何なのかの気づきをいただきました。

企画・運営

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【主担当・報告書】
枝見 太郎（一般財団法人富士福祉事業団）
鈴木 正昭（りすこ くおた復興支援活動団体協議会）
熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

No.6 ワカモノの声を聴く！ 若者を取り巻く“いま”を知る

開催目的

大学生たちの生活は、コロナ禍で一変しました。毎日オンライン授業で画面と向き合い、膨大な量の課題をこなし、人に会うこともできず、家でスマホを眺めながら日々を過ごしています。夢のキャンパスライフを思い描いていた1年生も、入学式はなく、学校の敷地に足を踏み入れたことすらない学生もいます。「どうにかしたい」「何かしなきゃ」と思いながらも、どうしたらいいかわからず、身動きが取れなくなっている若者たちの現状を知ってほしいという思いから分科会を企画しました。

開催目的は、大学生の生の声を聴き、彼らを身近で支える支援者の視点も交えながら、支援者がこれからすべきこと・できることのヒントを得る場をつくることです。

開催日時・方法

2月13日（土）10：00～12：00（オンライン&会場参加）

参加者数

41名（参加者32名：うちオンライン26名 会場6名、出演者4名、ボランティア1名、スタッフ4名）

出演者

小島 祥美さん（東京外国語大学 多言語多文化共生センター 准教授）

高橋 希実さん（武蔵大学 人文学部 英語英米文化学科3年生）

星 直翔さん（武蔵大学 人文学部 英語英米文化学科2年生）

船崎 美穂さん（武蔵野大学 教育学部 教育学科1年生）

内容・成果・課題

◎タイムスケジュール

- 10：00 問題提起「大学生に何が起きているのか」
- 10：10 大学生たちの声（船崎さん、星さん、高橋さん）
- 10：40 支援者から見た大学生と取り組み（小島さん）
- 11：00 感想共有・質疑応答
- 12：00 終了

◎発表内容

コロナ禍の大学生の現状について、船崎さん・星さん・高橋さんから、この1年をどのように過ごしていたのか、その中で感じていたことを伝えていただきました。その後、小島さんに大学生を身近で支える教員の立場から、学生たちの状況と事例について発表していただきました。

【大学生の立場から】船崎さんは、上京して一人暮らしをする大学1年生の立場から、入学してからの1年間の心情と今後大学側に求めるサポートについてお話ししていただきました。大学2年生の星さんには、一日中オンライン授業を受けることで生じるさまざまな負担について、大学3年生の高橋さんには、友人に大学で会えないことで生じる問題や就職活動における困り事と大学生の自粛の辛さについてお話ししていただきました。

【支援者の立場から】小島さんは、大学が全面オンライン授業に切り替わった後に開いた、ゼミ生とのオンライン面談で、急に泣き出したり、不安や焦りの気持ちを吐露したりする学生たちの姿を見て、想像以上に学生が追い込まれていることに初めて気づき、驚いたそうです。その後、外国にルーツを持つ子どもたちがいる地域の家庭と大学生をオンラインでつなぎ、学習支援のボランティアを実施しました。活動を通して、自分にもできることがあると学生たちが元気になっていったそうです。大学生たちが置かれている状況は、大人たちが思っているよりも深刻であり、今後も支援者が学生たちの声を拾い上げ、安心できる居場所や活動をつくっていく必要性について伝えていただきました。

◎感想共有と質疑応答

出演者の方々にも入っていただき、会場では2グループ、オンラインでは5グループに分かれ、感想共有を行い、その後全体で質疑応答を行いました。参加者の所属は、ボランティアコーディネーター、介護関係者、ボランティアセンター、区の職員、NPO 法人の職員等でした。

以下、みなさんからあがったご意見やご質問の一部を紹介いたします。

- ・若者の考えを知ることができてよかった
- ・大学生に自分たちの活動を知ってもらうにはどうしたらいいか
- ・現在、大学側が課外活動を禁止しているので、多くの学生たちが利用する大学のボランティアセンターで提供されている情報が少ない
- ・大学生が大学の対応で助かったことは何か
- ・授業をやるという目的だけ達成するならオンラインは良いが、それ以外の学びや経験ができなくなっている（人間関係、コミュニケーション等）
- ・若者が挑戦したり失敗したりできる環境がもっと必要、困った時に相談する相手がいない
- ・実際に人と会うことは難しいので、オンラインを利用するのも一つの方法だが、安全性という面でまだ難しいところがある
- ・若い人も年配の方も両方辛いので、話せる場があることが大事



◎成果と課題

【成果】第一に、支援者である参加者のみなさんに大学生たちの現状や思いを共有できました。さらに、感想共有や質疑応答では、活動中の疑問や悩みがあがったり、お互いの取り組みを共有したりと、大学生の声をもとに、自発的で活発な意見交換が行われました。いただいた感想からも、参加者のみなさんが普段携わっている活動へのヒントを得る機会になったと思います。

【課題】支援者側から大学生に対して、さまざまなプログラムを提案しているものの、情報量が多すぎたり、プログラムの対象層が広すぎたりすることで参加しづらくなってしまうことがわかりました。大学生たちが安心して学生生活を送れるよう、居場所の確保や環境づくりが今後の課題です。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・大学生当事者の話と支援者、両者の生の声が聴けたことで、それぞれが感じていることを知ることができ、学びになりました。
- ・コロナ禍で大学生のみなさんが辛い思いをしていることは、周囲の学生と話して理解しているつもりでしたが、一日の過ごし方をグラフで示す等、全体的で具体的なお話を伺い、置かれた状況をより理解し共感することができました。また、社会の動きに対する不満や憤り、理解してほしいという想いに打たれました。日頃は口に出しづらいと思うので、こういう場が設定されたことの意義を強く感じました。
- ・大学生の現状、友人のお子さんの話で知っていたような気でいましたが、実際はもう少し深刻でした。学生さんの話が聞けたことで大学生が不安な気持ちがよくわかりました。また、支援している方が学生の気持ちに寄り添うことを大事にしていることに意義を感じました。

企画・運営

村瀬 つむぎ（NPO 法人グッド）【主担当・報告書】

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON 〈樹恩〉 NETWORK）【副担当】

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）

市川 徹（株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団）

No.7 災害大国日本、地域の力を結集！

開催目的

毎年のように自然災害が起きる日本。行政、地縁組織は日頃から地域の防災・減災に取り組んでいますが、それだけでは限界があります。一方、地域では多様なボランティア・市民活動団体が日頃から活動を行っていますが、災害支援に取り組む団体は多くはありません。「災害時にもいかせる地域力」について、事例を交えながら、普段の活動を災害時にどうかすことができるのかを考えます。

開催日時

2月13日（土）13：30～15：30（オンライン＆会場参加）

参加者数

30名（参加者24名：うちオンライン18名 会場6名、出演者2名、スタッフ4名）

出演者

吉田 建治さん（日本NPOセンター 事務局長）

加納 基成さん（千葉南部災害支援センター センター長／NPO 法人ディープデモクラシーセンター 副代表理事／ちば居住支援センター センター長）

内容・成果・課題

1 出演者からのお話（課題提起）

吉田さんからは、災害時には多くの困りごとが発生するが、みんなが困るような基本的なことについては、行政の役割として対応する制度が整えられていること、とはいえ一部の人の困りごとや想定しきれない困りごとなど、制度で対応できないことは必ず発生し、その対応に自発的で多様な市民活動への期待がある、というお話がありました。内閣府によると、約5万1,000あるNPO法人のうち、定款で「災害救援活動」を活動の種類として位置付けている法人は4,400法人しかありません。このことについて、「定款に入っていないと災害時に自分たちが何か支援活動をしようという意識になりにくい。しかし、災害は分野ではなく状態の違いであり、災害が発生した際には、その地域にいる全ての人に関係する、だからこそ、あらゆる活動に災害時があり、あらゆる団体に出番がある」と説明されました。また、「多様な主体が連携しながら取り組めると理想的ではあるが、どんな団体があるかは地域ごとに異なるので、地域に合った形で取り組むことが必要である」と課題提起をいただきました。

続いて、加納さんからは2019年の台風15号、19号により甚大な被害を受けた千葉県での活動について事例報告をいただきました。

もともとディープデモクラシーセンターで中間支援組織として相談窓口を行っていた加納さんですが、地元が被災した際に県外から駆けつけてくれた災害支援団体から、復興までには長い時間がかかること、外部の支援はいずれ終わり、最終的には地域で引き取る必要があることを聞いたことが、千葉南部災害支援センターを設立するきっかけになったそうです。



千葉県では、瓦屋根の被害が多く、応急対応としてのブルーシート展張が必要な状況でした。そのため、千葉南部災害支援センターでは、被災地で屋根上の活動を行ってきた団体を講師に、主に高所作業の経験がある消防や建築関係の人たちを対象にブルーシート展張講習会を行っています。その活動を通して、地元での継続的な担い手育成が重要であること、災害によって加速された元からの地域課題に地域のNPO・市民活動団体のエンパワーメントが必要であると課題提起をいただきました。

2 話を深める（質疑応答）

参加者の方からの質問にも答えていただきながら、より具体的にイメージできるように話を伺っていただきました。下記には、お2人からいただいたコメントをまとめました。

- どんな活動であっても、平時からどれだけ地域のことにコミットしているかが災害時に問われる
- やりたいこと、できること、求められていることが重なる活動ができるといい
- “防災”ではなかなか人が集まらない、地域の団体／強み／弱み／地域のホットなトピックなど、どんな切り口があるかを考え、できるだけ分野を超えた集まりを平時からできているといい
- 目の前に困っている人がいて、地域に対応する活動をしている団体がいなかったからやるしかない
- 平時から、“つなぐ人”が大切、それぞれのやりたい気持ちを大切にすることが重要
- 災害支援団体ではない団体の活動事例として、環境系の団体が避難所にいる子どもや親子向けのプログラムを実施したことや被災者自身が花壇の整備をすることを応援したことで地域の雰囲気が変わった

3 意見交換（グループディスカッション）

参加者同士で話を聞いての感想やヒントになったこと、自分たちでできることについて意見交換を行いました。下記には、グループで出た意見をまとめました。

- 防災をどう根づかせるか、入口のハードルを下げ、入りやすくすることが必要
- 専門性のある人が特化できるようにサポートできる体制を整えておくことも大事
- 専門性と地域性を考えながら、地域資源を見つけることが大切
- あらゆる世代、あらゆる人に出番がある！

4 成果と課題

参加者の多くが防災も含め、地域で活動している方だったので、お互いの活動の共有などもでき、平時からいかに地域の多様な主体をつないでいけるか、ヒントを得られたのではないかと思います。とはいえ、「災害」という非日常をイメージしてもらうには、もっと工夫が必要だと改めて感じました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- 平時のつながりや、いかに団体やそこにいる人たちの得意不得意を知っておくか、またそれをいかに組み合わせるか次第で災害時の困りごとへの対応力が広がることがよくわかりました。
- 防災訓練に若い方の参加が少ないのが課題でした。今回、「災害や防災のテーマだけでなく、ゴミ拾いや地域の地質の雑学を入れた複合のテーマで人を集める」ということが参考になりました。
- 既存の地元団体などが、分野を超えてできる支援の事例などを聞かせていただくことができ、日頃災害支援に取り組んでいない団体にできる可能性が見えてきました。

企画・運営

神元 幸津江（認定NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）【主担当・報告書】

五十嵐 豪（特定非営利活動法人 CWS Japan）

No.8 急増する孤独死は人ごとではない！ ～年間3万人その現状とは～Part 2

開催目的

孤独死は年間3万人を超え、社会問題として今後ますます増えていきます。コロナ禍によって人との接触が減少したことで、単身者にはその危険が増大しています。孤独死の現場で特殊清掃をしている小島美羽氏を招き、行政関係者を交えてコロナ禍による対策や対応並びに孤独死への注意喚起と啓蒙活動について考えました。

開催日時・方法

2月13日(土) 13:30～15:30 (オンライン&会場参加)

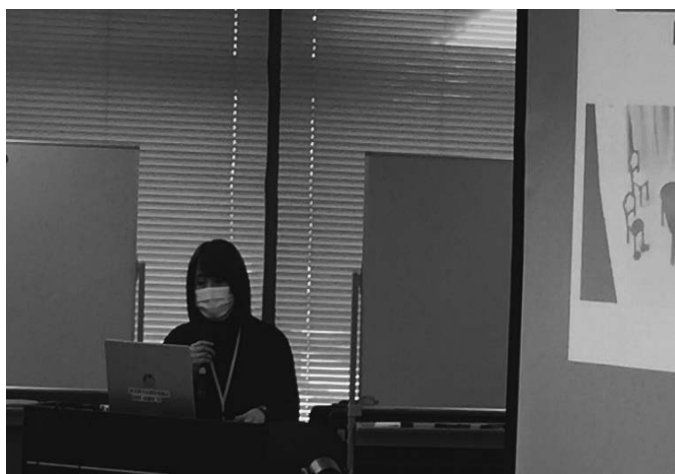
参加者数

52名(参加者43名：うちオンライン31名 会場12名、出演者3名、スタッフ6名)

出演者

小島 美羽さん(遺品整理クリーンサービス 「時が止まった部屋」著者)
木村 紘輔さん(足立区社会福祉協議会 地域福祉課 主事)
廣瀬 カズ子さん(ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし 理事長)

内容



<孤独死についての紹介>

事前に見て頂いた動画は1年以上もかけて撮影されたもので、外国人の視点から日本の孤独死という理解しづらい状況をアジアに向けて発信するために作成されました。

特殊清掃をされている現場での視点から、孤独死をされる方の状況や生活背景・孤立化してゴミ屋敷になってしまう現実など、自身が制作されたミニチュアを持って来て紹介していただきました。

増えている孤独死は、年齢や貧富に関係なく人生でのつまづきなどによって誰にでも起こり得ること。現場で作業をしている小島氏は亡くなられた方を家族だと思って作業しており、その方の人生に寄り添った強い思いで仕事をされていることが強く印象に残りました。

<コロナ禍による対応や対策事例の紹介>

足立区社会福祉協議会の木村紘輔さんより、地域活動への支援としてコロナ禍によるサロンに代わる「ささえあいコール支援事業」について紹介がありました。足立区内65箇所のふれあいサロンの世話人(民間レベル)が、サロン参加者を孤立化させないために、約1,000名を対象に個別の電話連絡をする見守りを実施しました。電話を受ける参加者からは、声が聞けることで安心につながり、人恋しさからつい長話しになると好評を博しており、感謝の声が数多く寄せられています。

市民活動学習推進センターの廣瀬カズ子さんからは、民生委員として独居の高齢者と数多く接してきて、近所の方とのつながりの大切さと地域みんなで街作りをすることの重要性を紹介していただきま

した。しかし、その反面コロナ禍によって行政からは民生委員の訪問活動について「無理のない範囲で…」というように変容しています。自ら行っているサロン活動などを通じて、つながりを絶やさない取り組みをされています。

成果

会場とオンラインでの開催となり、分科会の開催前に事前告知を行い、小島さんが出演されている「UNDERCOVER ASIA: LONELY DEATHS」（YouTube に掲載されている孤独死の現場で作業をされている動画）を見ていただいたことで、より孤独死の現実の理解を深めてもらうことができました。



オンラインによる実施のためか、若い参加者も多く「死」ということが身の回りには今までなく、初めて聞くことや現実として存在するものだということに驚きと関心を寄せていただきました。

グループワークから、普段あまり意識していない孤独死は、身近にあり、誰しものが当事者になり得るという声が多く参加者から聞かれました。

登壇者の話からもわかるように、やはり重要なことは、人とのつながりをどのように持つかということがコロナ禍ということに限らず地域社会で孤立や孤独死を増やさないために最も大切なことだと言えるでしょう。

課題

長引くコロナ禍の今、これからは with コロナという視点に立った取り組みを考えていかなければなりません。

また、孤独死そのものよりも孤立してしまう人が、地域や街作りの視点から、どのようにつながりを作り共生社会の一員として関わっていける仕組みを作るかが重要であり、大きな課題でもあると思います。そのためには、一人ひとりができること、町会・自治会などの地域や社会、市区町村や社会福祉協議会・ボランティア、民間企業や NPO 等がそれぞれの立場でできることを考えていくことが重要です。

さらに、それぞれの立場でできることをするだけで終わりではなく、力を合わせて連携を計り互いが協力してこそ価値が生まれてくるのではないのでしょうか。

そのためには、垣根を越えた情報交換や相互理解の場を作っていくことから始めていかなければなりません。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・参加したことで、自分の住む区の一人暮らしへのサポートはどんなものがあるか？役所や社協を調べてみようと思いました。危機感がもてました。
- ・以前から内容に興味のある分科会で、自分自身も孤独死をする可能性があるということを頭に入れながら、日々のつながりを絶たないようにしたいです。
- ・自分も孤独死をする可能性があるのだと深く考えさせられる分科会でした。

企画・運営

紺野 功（特定非営利活動法人エンリッチ）【主担当・報告書】

上田 英司（日本 NPO センター）

山田 翔太（一般財団法人世田谷トラストまちづくり）

No.9 感じる福祉教育の“ひと工夫”を考えよう！

開催目的

社会福祉協議会や中間支援団体によせられる福祉教育は、車いす体験やアイマスク体験などの障がい者理解が多く、現行の福祉教育では、“恐怖体験”や“手助けしてほしいこと”のみしか伝わっておらず、障がい当事者が伝えたいことが伝わっているのかと悩むコーディネーターも多くいます。体験を通して学ぶことも多くありますが、体験だけでなく、当事者の声を直接聞くことや触れ合うことで得られる学びも多いのではないのでしょうか。

この分科会では、新しい福祉教育プログラムを1から考えるのではなく、現行のプログラムをどう工夫すれば、子どもたちや参加者に伝えたいことを感じてもらえる福祉教育を実施することができるのかを参加者のみんなと考えたいと思い、企画しました。

開催日時・方法

2月13日（土）13：30～15：30（オンライン参加のみ）

参加者数

26名（参加者19名、出演者2名、スタッフ4名、その他1名）

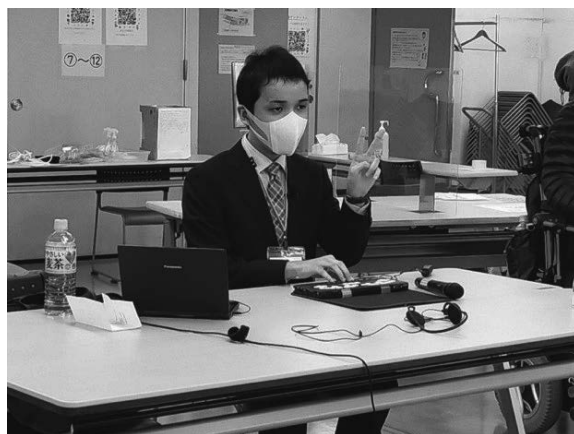
出演者

高見 和幸さん（荒川在宅難病患者会 代表）

青木 悠弥さん（立教大学 コミュニティ福祉学部3年／西東京市視覚障害者協会 理事）



高見 和幸さん



青木 悠弥さん

内容・成果・課題

1 登壇者より福祉教育を通して伝えたいことについて報告

（1）青木 悠弥さん（立教大学 コミュニティ福祉学部3年／西東京市視覚障害者協会 理事）

「障害当事者が本当に伝えたいことは？～1人の若い視覚障害者の視点から～」という内容でご講演いただきました。青木さんは、福祉教育の実施経験は少ないですが、これから福祉教育を担っていく立場として、また、同年代の人たちや年の近い子どもたちに伝えたいことをメインにお話しいただきました。

自分の幼少期、普通学級に通っていた時の経験から盲学校での経験など、自分自身の気づきと当事者として福祉教育で伝えたいことを7つにまとめてお話しいただきました。①障害者を自然に受け入れる「心」を持ってほしい、②まずは「ちょっとした声掛け」から、③「違い」を恐れないこと、④障害者の神話化を避ける、⑤多様性に目を向けてほしい、⑥障害者ではなく、「目の前の相手」を見てほしい、⑦障害者も「ただ求める」のは良くない。

（２）高見 和幸さん（荒川在宅難病患者会 代表）

数多くご協力いただいている福祉教育の経験から、福祉教育を実施するにあたって感じている課題や新たに組みたいこと、今後伝えていきたいことをお話しいただきました。

今までの授業では、車いすの特徴や、手助けしてほしいことを中心に話していたことで、同じ障がいでも、一人ひとり違いがあることや個々の魅力を伝えきれていなかったのではないかと話しかから、今後は、個々の魅力を伝えられるような授業や多様な学び方があることを伝えていきたいという話がありました。

（３）参加者同士で内容を共有

Zoom のブレイクアウトセッションを使用し、オンライン参加者同士で登壇者の話の内容から、各々の団体に工夫できそうなことについてや、現在各団体に工夫していることなどを話し合い、参加者同士の交流と情報の共有を行いました。

２ 成果・課題

（１）成果

同じような問題意識をもった人たちが、つながることができたことがとても良かったと思います。オンライン開催ということで近隣だけでなく、全国各地の人と意見交換することができ、今後に活かせる話を幅広く聞くことができました。

（２）課題

分科会を通して学び、共有したことや当事者の思いを、コーディネーターがどのように学校等にアプローチするのか、どのように先生方を巻き込むのか（計画するプログラムを行う目的の共有・当事者や地域の方の思いを伝え先生の心を揺らす等）、手法についても具体的に考えることが課題であると思いました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・オンライン開催により、通常であれば出会えない地域の方たちとも出会えて面白かった。当事者の方の話してくれる内容は、特に為になった。参考になった。
- ・講師のお２人のお話には、納得するばかりで、同じこと違うこと、そしてそれを補い合うこと、交流や体験、講話を通じてそういったことを学び合える場づくりを進めていきたいと思いました。また、グループワークでは、他県の方と情報交換し、同じような悩みを抱きながら取り組みを進めていることを感じる事ができて良かったです。
- ・当事者の方の率直な意見や思いを聞くことができ、これまで指針もなくコーディネートしていた福祉学習でしたが、参考にしたいと思うことがたくさんありました（青木さんの伝えてくださった７つのポイントや高見さんのおっしゃっていた個別性を伝えることなど）。

企画・運営

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）【主担当・報告書】

藤田 豊（東京都立新宿山吹高等学校）【副担当】

No.10 コロナ禍での居場所づくりの現在地 ～高齢者の交流の場を対象に～

開催目的

密を良しとしてきた地域の居場所づくり。感染症により集うことが難しくなり、多くの拠点が休止しました。居場所づくり団体から休止中の取り組みや再開の経緯、どのような想いでこの事態を乗り越えようとしているのかを伺い、研究者から健康・福祉の観点でみた居場所づくりについてお話しいただきます。感染症の流行を経験した今、居場所づくりの意義について考える会です。

開催日時・方法

2月13日(土) 16:30～18:30(オンライン&会場参加)

参加者数

55名(参加者44名:うちオンライン32名 会場12名、出演者3名、スタッフ4名、ボランティア4名)

出演者

藤原 佳典さん(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム 研究部長)

望月 美智子さん(まちナカ・コミュニティ 西荻みなみ 理事)

大久保 隆さん(おむすび倶楽部友の会 代表)

山田 翔太(一般財団法人世田谷トラストまちづくり)

内容・成果・課題

1 「おむすびハウスのご紹介」(大久保 隆さん)

(1) 設立経緯と活動概要

1970年代に竣工したRCの建物を活用しています。大学の社会人講座で空き家オーナーが受講生らに相談したのがきっかけで、2017年3月に検討を始めました。建物を「おむすびハウス」、運営団体を「おむすび倶楽部友の会」とし、改修を経て同年10月に開設。人と人を結びつける都市居住型の地域交流サロンです。開設から2年で参加者が累計1万人を超えました。参加者も運営者も元気な高齢者が中心で、いろいろな興味があります。ひとつのプログラムだと飽きるので、多様な企画を立てています。プログラム後はお話ができるお茶の時間を設けていましたが、コロナによりできなくなりました。

(2) つなかりを絶やさないために

昨年2月から7月まで休止し、一旦再開しましたが11月に再休止を決めました。再開にあたり、運営委員も考え方がさまざまなので、再開の基本方針を策定しました。「Go To コミュニティ」、家からコミュニティに出てきてもらうことが理念です。苦労したのが、人数の絞り方です。これまで通りではどっと来てしまうので、声掛け先を限定しました。3密を避けるため時間を短縮したり、屋外で開催したり、2回に分けるなど工夫しました。休止中はオーナーが約140名の個人・団体に資料を郵送やポストイングで届けました。つなかりを絶やさないためにです。参加者やボランティアからお便りをたくさんいただきました。こういったつなかりをどう継続するかを考えていかなければなりません。

2 「コロナ禍でのコミュニティ活動 西荻みなみの取り組み」(望月 美智子さん)

(1) 設立経緯と活動概要

原点は杉並区社会福祉協議会の「きずなサロン」です。公共施設を借りていましたが、会場の確保が難しくなりました。2018年3月、駅から3分のストアが閉店すると聞き、オーナーに掛け合ったところ「地域に70年お世話になったから」と了承してくれました。サロンのメンバーを中心に準備会を立ち上げ、誰もが安心して暮らすために学び合い、未来へつながる活動をカタチにするコミュニティスペースとして同年10月に開設しました。高齢者向けの「昼下りの歌声喫茶」、子どもが運営する「子

供駄菓子屋よねや」、お父さんによる「おっちゃん食堂」など多世代に向けた活動をしてきました。新聞に取り上げられ、ラジオの生放送の会場になったりと浸透していったものの、「ここは宗教団体ですか」と聞かれることもあり、まだまだ地域住民に知れ渡っていないのが現状です。

(2) 今だからこそ必要なこと

休館は昨年2月から6月まで。外にポストと紙を置いて、お互いを励ますメッセージを募集するとたくさん集まりました。道行く人に向けてそれらをガラス面に掲示しました。また、これまでの参加者、単身高齢者の方に「お元気ですか」と電話をかけていきました。「人と話すの何日ぶりかしら」と大変喜ばれました。休館中は「いつ開くの?」と問い合わせが相次ぎました。シャッターを閉めていてはお店と同じで良い感じがしません。今だからこそ開けようよと、現在は当番制にして開けています。コロナだからと怖がってばかりではなく、些細なことでも広げていかなければいけないと思っています。

3 「3つのSで乗り越えよう!ウィズ・コロナ時代の居場所とは」(藤原 佳典さん)

(1) 巣籠もり生活と生活機能低下

フレイル(虚弱)をいかに防ぐかが重要です。大半の方は1~2年の自粛生活をして心身の健康に影響しにくいですが、もともと活動能力指標が低い方は要注意です。活動は自主活動なので、いつでも辞められます。若い時なら解散しても再度立ち上げができますが、高齢の場合は難しくなります。休止や縮小はやむを得ないですが、灯火だけは消さないでください。

(2) これからの介護予防と多様な通いの場

ボランティアも趣味活動も健康に良く、どちらも月1回以上参加すればより効果があります。趣味として学んでボランティアとして放電する、ボランティアをする中で知識や技術を向上しようと充電する、趣味とボランティアの好循環が望ましい高齢者の活動パターンです。そして、世代を問わず、世代内交流をしている者は交流をしていない者より精神的に健康であり、世代間交流もしている者はさらに健康度が高いことがわかりました。サロンは、一般の市民にもひらかれていることがとても重要です。

(3) 活動の再開に向けて

自粛期間は充電期間です。活動の目的・意義を再確認し、自身の能力を高める練習・学習の時期であり、他団体と情報交換したり、つながりづくりもできます。3Sで乗り越えようということで、まずはセンス(工夫)です。今までと同様のやり方では難しく、センスを磨くことが必要です。そしてシナジー(協働)。自分たちだけでは限界があり、他団体との連携が求められます。最後がスマイル(明るく)。無意識でやっているかと思いますが、この3Sを認識して乗り越えられればと思います。

4 分科会を終えて

地域で実践している2団体から、まちなかの空き空間との出会いとネットワークの拡大・活用によって拠点を開設し、地域資源を掘り起こして活動を拡大してきたこと、コロナ禍で休止や縮小をしながらも創意工夫によって継続していることがわかりました。研究者から、交流活動の健康効果だけでなく、継続の大切さ、自粛期間の有効的な活動方法、コロナ禍を乗り越えるヒントを教授いただきました。ディスカッションでは、地域活動には住民目線での気づきやフットワークの軽さがあり、自分たちだけで解決するのではなく連携・協働が重要だと示唆されました。居場所づくりは孤立することもあり、コロナ禍では顕著に現れています。コロナ禍を乗り越えるためにも横のつながりが重要だと再認識しました。他者の取り組みを知れる機会・仕掛けを積極的に設けることが必要です。

参加者の声(アンケート結果などから)

- ・多世代交流の具体的な取り組みや研究結果についてのお話が印象的でした。
- ・地域の理解を得ることが難しく、なかなか先に進めていません。無理なくできることを模索していますが、今日の講演からヒントや勇気をいただきました。もう少し頑張りたいと思います。

企画・運営

山田 翔太(一般財団法人世田谷トラストまちづくり)【主担当・報告書】

紺野 功(特定非営利活動法人エンリッチ)

No.11 コロナ禍における地域イベントオンライン化の実状

開催目的

コロナ禍において、多くの地域イベントが中止に追い込まれる中、オンラインで開催されたイベントも数多く存在します。本分科会では、オンライン開催を実現した団体より開催に至るまでの過程を共有いただき、今後、こういった状況下でイベント開催を実現するための多くのヒントを持ち帰ることができることを目的に開催しました。

開催日時・方法

2月13日（土）16:30～18:30（オンライン&会場参加）

参加者数

26名（参加者19名：うちオンライン19名 会場0名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者

高野 雄太さん（尾山台フェスティバル ONLINE/ 尾山台商栄会商店街振興組合 理事）

今井 迪代さん（アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局）

KAEDE さん（一般社団法人ほしかぜ 代表/ オンライン盆踊り大会主催・総合演出）

水田 征吾（ちょうふチャリティーウォーク 実行委員長/ 調布市市民活動支援センター 運営委員）

内容・成果・課題

本分科会では、地域住民の方々が多数参加するイベントを開催、運営されている方々をパネリストとしてお呼びし、コロナ禍で実施されたイベントについて語っていただきました。それぞれの想いや取り組みの紹介、分科会参加者との質疑応答を通して、参加者それぞれが今期の実施に向けてのヒントを持ち帰ることができました。

■「Stay Community」

高野さんはご自身が所属する商店街を中心に、日々の地域活動に取り組んでいます。コロナ禍では、外出自粛によるコミュニティ接点の減少を懸念し、オンラインでのコミュニティづくりの活動を行ったり、感染対策をしながらも楽しみながらつながりが作れるような活動を続けていました。その一つが「土曜日にカレーの材料を道行く人に無料配布し、翌日曜日にそれぞれ調理したカレーをオンラインで一緒に食べる」というもので、コロナ禍で物理的に人と人が集まることが難しいからこそ、暮らしを楽しむことにチャレンジされていました。「Stay Home」でも「Go to Travel」でもなく、「Stay Community」という言葉も共感を呼ぶキーワードとして際立っています。また、学生との協働もとても大切にしています。学生たちは、それぞれの取り組みの重要な原動力になっています。



■「立ち止まって対話できたことは財産」

市民とアートを通じてあらゆる世代への活動運営、イベント開催をされている今井さんにとって、2020年は従来の活動や準備していたイベントの中止の判断をせざるを得ない厳しい年となりました。判断に至るまでに活動仲間とともに対話を繰り返したことが、「立ち止まって対話できたことは財産」とふりかえる様子は印象的でした。動画づくりなどオンラインの活動に挑戦したり、密を避けた小規模な実践をしながら、「できること、できないこと」を確かめていきました。試行錯誤により多くの学び、発見があり、本年は、その経験をもとに新しいプログラムの開発への意欲を示しました。



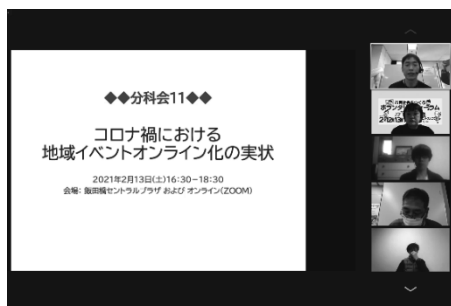
■「私、正直オンライン嫌いで、絶対ない！って思っていました」

キッズパフォーマンスをされている団体にとって、コロナ禍は「接触をさける」という、お稽古も発表の場も奪われる状況となります。休校によって児童たちが、外部との接触をなくしてしまう状況が継続することを憂慮した KAEDE さんは、これまで考えもしなかったオンラインでの活動を開始することになります。ご自身も学びつつ Zoom でつながる「オンライン学園」を開始。オンラインでもつながる喜びと可能性を強く感じ、映像分野の仲間と連携して大規模な企画を始動。夏に「オンライン盆踊り大会」を開催しました。「私、正直オンライン嫌いで、絶対ない！って思っていました」という彼女のドラステックな変化には驚きがありました。



■「10人つながれば、1人くらいはITが得意な人がいる」

毎年数百名が参加するチャリティーイベントを開催する水田は、コロナ禍と呼ばれ始めたころから、活動の意義を最優先としてとらえ、「どんな形であろうが開催する」と決めていました。これまでのつながりから、当日は映像機材やパソコンソフト、YouTube、Twitter、Facebook を活用し、接触を伴わない、実況生配信ウォークラリーイベントを開催しました。従来の実行委員メンバーで低コストで実現できたのも、「10人つながれば、1人くらいはITが得意な人がいる」という、普段からのつながりの賜物でした。また、「手法より、まず活動目的から考えれば、おのずと実施する方向に進む」という言葉も参加者の開催意欲を掻き立てるものになりました。



共通課題として、オンラインが不慣れな方々の、参加に対するハードルが高いことが挙げられます。これらも日々のつながりとの関連が強く、つながりを通してハードルを下げるのが可能なため、日々、地道につながりを構築していく大切さを改めて認識する時間となりました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・オンラインか対面かという手段的な区切りではなく、目的に向けてパワフルに試行錯誤しながら楽しんでやっておられる皆さんのお話を聴いて、想いがしっかりあればできることはいくらかでもあるということを実感しました。
- ・オンラインの活用やボランティアとの協働を目指しながら、イベントを実施するためのヒントをたくさんいただきました。
- ・皆様のお話からヒントを得ることができ、尚且つ実践できそうなものだったので、大変勉強になりました。
- ・日頃のつながり、イベントの目的の再確認など、とても参考になりました。

企画・運営

水田 征吾（ちょうふチャリティーウォーク）【主担当・報告書】

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【主担当】

藤田 豊（東京都立新宿山吹高等学校）

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）

No.12 オンラインでのつながりづくりを考える ～コロナでの経験から～

開催目的

新型コロナの感染拡大防止のため、集まることが難しくなった結果、地域活動が縮小し、つながりが薄くなった人たちが大きな影響を受けています。一方で、地域活動のオンライン化により、新たなつながりも生まれています。これからの時代、必要な人たちにどう情報を届けるのか、オンラインを活用した新たなつながりづくりについて考えました。

開催日時・方法

2月13日（土）16：30～18：00（オンライン参加のみ）

参加者数

26名（参加者21名、出演者3名、スタッフ2名）

出演者

西川 正さん（NPO 法人ハズオン埼玉 常務理事）※左上

須田 正子さん（よりあい*ええげえし 事務局長）※下

石橋 裕子さん（NPO 法人佐賀県放課後児童クラブ連絡会 理事長）※右上

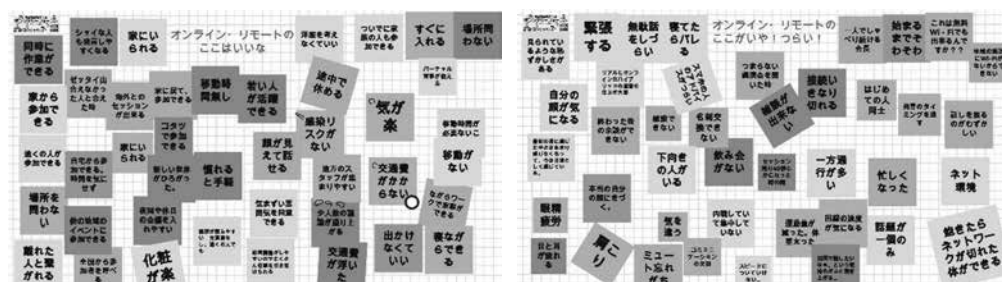


内容・成果・課題

<内容>

1 アイスブレイク（西川さん）

最初に、西川さんの進行でアイスブレイクを行いました。アイスブレイクは Google Jamboard を使い、「七輪に乗せる具は?」「オンラインでよかったこと／よくなかったこと」など、オンラインでも参加者同士の書き込みが全員に見える形で行いました。



西川正さん ハズオン埼玉

2 事例紹介①：よりあい*ええげえし（須田さん）

設立は2001年、介護保険制度の施行に合わせて地域の中で交流する場が必要との想いで始めました。「ええげえし」とは秩父地方の方言で「相返し」、お互いの気持ちを表した言葉です。毎週月曜午前中に高齢者サロン「よりあいの会」を開催、いつも最後に輪になって感想を聴き合うなど、誰もが主役の時間を設け黙って帰る人がいないようにしています。コロナが感染拡大する中、3月によりあいの会を休止、参加者が集まらないことから5月からオンライン化に挑戦、6月には全員がZoomを使えるようになったため、10月には活動拠点をなくしました。やってみて、高齢者や外出困難者にこそ、オンライン交流ツールの必要性があると感じました。あきらめずに声をかけ続けていくことでみんなができるようになっていく。信頼できる仲間がいるからこそ心の余裕が持てる。お互いに知恵を出し合える。聴き合える文化があったからこそ、オンラインにスムーズに移行できたのではと思っています。



よりあい*ええげえし
須田正子さん

3 事例紹介②：NPO 法人佐賀県放課後児童クラブ連絡会（石橋さん）

普段は佐賀県で主に学童保育に関わる仕事をしています。昨年の3月、コロナで小学校が休校になりましたが、学童保育は休むことなく動いていて、私たちは動きを止めないようにしようとの一心でZoomを取り入れることにしました。まずは4月に職員の活動に取り入れることから始め、とにかく毎日やることで、エラーの連続でしたが、少しずつオンラインの手法を習得していきました。特にゴールデンウィーク中は夜に4日連続でZoom会議を行ったり、オンラインアイスブレイクやオールナイト学童保育居酒屋などのイベントを行ったりするなど、2月までに夜活動92回／朝活132回を重ね、仲間と一緒に笑い／一緒に遊んでできました。そこから発展して、県内や全国の有志でオンライン講座やwebセミナーにも挑戦したり、最近では、子育てママと子育て議員さんとのおしゃべり会なども開催したりしています。最初は戸惑いもありましたが、安心してエラーできることで、どんどんトライが生まれたように思います。



4 グループトーク

西川さんの進行で、好きなおでんの具ごとにブレイクアウトルームに分かれて、感想などのグループトークを行いました。また、石橋さんや西川さんより、メトロノーム、スクリーンショット用お面づくり、名曲喫茶など、オンライン上でのアイスブレイクの事例紹介もありました。



参加者からは、高齢者などオンラインに抵抗感のある方々への最初の一步をどうするか、という質問がありました。

これに対して、須田さんから、実際にやってみれば自分でもやれるし楽しいことがわかる。ここは逆に声をかけるチャンスと捉えて、できるまで1対1で寄り添っていくことが大事。西川さんからは、何度失敗してもそれを受け入れる会の雰囲気そのものが大切で、話したことを覚えてなくても楽しかった気持ちが残るような会になるとよいのでは、というお話がありました。

<成果および課題>

*分科会全体を通じて、西川さんの進行のおかげで、ゆるさの中に安心感を持つことができました。

「トライ安堵エラー～愉快地に楽しく面白く～」、安心して参加できる場づくりというのはオンラインでもオフラインでも変わらず、参加して楽しいと思える空気づくりが大切だと感じました。

*前半が押してしまい、後半のグループトークの時間が短くなってしまったため、他の事例への応用を考えるなど、もう少し話題を掘り下げる時間を持つことができなかったことが残念でした。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・大変フレンドリーな雰囲気、ゲストの方や事例も驚きの連続。ズーム会議のためのコツも盛りだくさんで勉強になりました。自分も知らない人たちばかりで緊張していましたが、みなさんそうなんだと聞き、リラックスできました。コミュニティ活動にコロナは大きな転機でした。やらされ行事をやらなくて済んでよかったという声は私の周りにも聞こえて、でも前例にとらわれずに遊べる！いいお話でした。ありがとうございました。
- ・平均年齢77.7歳のオンラインサロンやオールナイトの取り組み等、面白く楽しそうな取り組みを聞けて良かったです。オンライン上での話し合いを視覚化するためにワードを画面共有しながら話し合いを打ち込んでいますが、ジャムボードという選択肢もあることを知れたことはとても参考になりました。最後、ブレイクアウトルームでは急ぎ足で自己紹介をすることになってしまいましたので、もう少し時間が欲しかったです。

企画・運営

市川 徹（株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【主担当・報告書】

成田 早紀（荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター）

※イラスト協力：かき

No.13 身近なところから、身近なところで考える、SDGs。

開催目的

地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っているSDGs。企業や協同組合などでも取り組みがすすめられていますが、私たちが生活する地域ではまだ知られていなかったり、遠い存在である場合も少なくありません。

新型コロナウイルスの感染が拡大し、「誰一人取り残さない」ことが身近でもますます大切になっているなかで、地域でSDGsに取り組んでいる事例を知り、明日からコロナ後のことを考えるための方法について話し合いました。

開催日時・方法

2月13日（土）16：30～18：30（オンライン参加のみ）

参加者数

33名（参加者26名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者

小柴 徳明さん（黒部市社会福祉協議会）
土居 弓子さん（SDGsいたばしネットワーク）
上田 英司さん（日本NPOセンター）



内容・成果・課題

●ローカルで行動を起こすタイミングに

SDGsを国内で推進するために政府に推進本部が置かれています。推進本部から出されている実施指針には市民社会への期待と地方自治体の役割が盛り込まれており、地方自治体では横断的な部局の設置によって取組みを的確に実施することやローカル指標の設定が期待されています。これに基づいていま多くの自治体が一生涯計画や指標づくりに取り組んでいる状況であり、市民やNPOがそれをウォッチし声を上げていくタイミングにあります。また、世界的に2020年には「行動の10年」が提起され、SDGsが認知される段階から行動に移す段階でなければサステナブルは達成できないといわれています。二地域（黒部市・板橋区）からの報告はまさにローカルで行動を起こしている事例です。事例を参考に自分の地域で何ができるかを一緒に考えられればと思います。（上田さん）

●つどいで宣言を発表。共同学習の場を中心に行動へ

ネットワークのきっかけは、ESD（＝持続可能な開発のための教育）についての全国大会に参加した板橋ゆかりのメンバーにより、SDGsについて考える準備会を始めたことです。2019年に「SDGsいたばしのつどい」を開催。NPO、民生委員、町会長など色々な人が600名集まり、2030年に向けてのキックオフと位置づけ、誰も置き去りにしない・されないを目標に具体的な自分ごととして行動することを理念に「SDGsいたばし宣言」を発表しました。宣言の理念を実現するためにつどいの賛同団体と一緒に、区内を6つのブロックに分けて区民による共同学習、意見交換の場をつくりました。住みやすい地域とは、こんな大人になりたい、こんなお年寄りになりたいなどイメージが出されました。思い描いている夢のようにするにはどうしたらよいか、2019年から2030年までに具体的に達成すべき目標、取組みで大切にしたいこと、どんな流れでどう取組むかなど考えている中で、孤立している人々たちを認め、つなげ、支え合うコミュニティをつくるビジョンが見えてきました。

学習会をベースに、ボランティアな活動で防災への取組みや、移動に不自由がある人のための交通をつくることはできないかなど、具体的な活動にすすんでいるところもあります。区もSDGsに取り組んでいるので何か協働できないかという話し合いも行い、区の担当者から学習会で取組みを発表してもら

いました。多くの市民に興味をもってもらうために貧困、ジェンダーの問題を取り上げてパネル展をしたり、介護保険だけでは担いきれない問題に対し近所でのたすけあいの仕組みが賛同プロジェクトとして広がっています。今後も各ブロックでの学習会と取組みを続けていければと思っています。（土居さん）

●地域課題とゴールをSDGsのプロセスを参考にした計画づくりで見える化

2019年から5か年の「黒部の福祉をよくする活動計画」を「5Goals for 黒部」というネーミングでつくりました。SDGsを参考に、難しいと思われる計画をもっと市民にわかりやすく伝え、みんなのめざすべきゴールを示していくことを考え方にして計画づくりをしました。持続可能な地域づくりとSDGsはつながっていることを前面に押し出していこうと思っていたところ、当時はSDGsそのものが職員にも市民にも知られておらず、SDGsと地域とは結構距離感があるということが分かりました。また地域課題といっても、市全体の課題もあれば家庭ひとつひとつの課題もあるし町内、自分の困りごともあります。市の課題と自分の課題は違うこともあるし、共通することもあること、でも、ひとりひとりの困りごとであることには違いないということを委員と話し、SDGsとの関連性も検討しながらつくっていきました。

みんなが地域や社会を良くしようと思っていることを前提に、シンプルに分かりやすく、課題と目標を「見える化」することによって「気づききっかけ」と「動くきっかけ」をつくりだせばよいのではという設定にしました。SDGsで挙げられている参画や平等なリーダーシップ・パートナーシップなどを会議の中で実践するために、代表者が集まって承認する従来の会議の形を変えて、20代から80代まで男女半々の参加を意識し、中高生以下には全員向けのアンケートをとって声を反映させたり、ワークショップをして課題設定や整理をしながら5つのゴールを決めていきました。「すべての人に福祉を」とか「パートナーシップで目標を達成する」などSDGsとの共通項もありますが、「U-40代の力を活かそう」などは委員と話し合ってきたゴールです。5つのゴールと3つの重点事業に5年間で取組もうとなっています。ウェブサイトで、ゴールに対して活動している団体やプロジェクトをさがしたりできるようにもしました。

計画を作った終わりではなく、今後はゴール達成のための推進チームをつくって、どう動いているのかをはかる指針をつくり、推進・評価が見える化する取組みをすすめていきます。（小柴さん）

●パートナーシップの課題

ローカルでのSDGsは冒頭の提起にもあったように自治体においても取組まれています。参加者からの質疑では、自治体・行政との関わりについて質問があり、市民や民間非営利セクターの取組みとして主体性を重視し、行政とは一線を画す姿勢をもちつつも、行政との連携や協働も意識したり提案をしていく、「二段構え」でやっているという答えもありました。ゴールと目標を共有し、達成に向けて多くの市民の参加をめざす一方で、行政も含むステークホルダー（多様な地域の関係者・団体）がお互いに関わり・連携し・尊重し合うかがローカルにおいても課題といえそうです。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・SDGsを考える際には、まずは自身の身近なところから考えていいのだということを学ぶことができた。自身の身近なところから考え、アクションに繋げていくことが重要だと感じた。
- ・実際の取り組み内容だけにとどまらず、それに伴うプロセス、その後の効果測定の方法等、様々な視点でSDGs推進を考える機会となりました。発表されたお二人の事例についても、各地域・団体の特徴がみられ、興味深かったです。

企画・運営

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

鹿住 貴之（認定NPO法人JUON〈樹恩〉NETWORK）【副担当】

No.14 オンラインカフェ「新しいカタチ」

開催目的

分科会の時間だけでは話さきれない！！もっと参加者同士で話したい！そんな参加者の皆さんや出演者、実行委員などが、オンライン&オフラインで自由に語り合える場です。分科会をつくる際に考えた、4つのテーマ「地域や居場所」「障害理解や当事者」「ボランティア」「新しい取り組みなど」の部屋に分かれて交流しました。

開催日時

2月13日（土）19:00～20:00

参加者数

29名（参加者14名：うちオンライン9名 会場5名、スタッフ15名）

内容・成果・課題

オンラインカフェ「新しいカタチ」は、会場参加者とオンライン参加者が一緒に交流する、まさに新しいカタチの交流会です。

Zoomのブレイクアウトセッションを使用し、オンライン上の4つのルームと、会場の4つの班に1台ずつ置かれたノートパソコンをつなぎ、オンラインと会場参加と双方向でのやりとりをしながら、交流を深めました。

今回の「地域や居場所」「障害理解や当事者」「ボランティア」「新しい取り組みなど」の4つは、実行委員会でも、分科会の内容を検討した際のグループです。

初めての試みで、参加人数は決して多くはありませんでしたが、参加者からは「時間不足が残念」との声が出るほど、少人数ならではの充実した交流の場となりました。

今後も、新しいカタチを模索していきたいと考えています。





「地域や居場所」



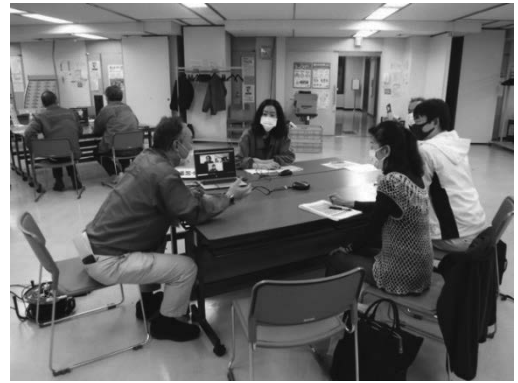
「障害理解や当事者」



「ボランティア」



「新しい取り組みなど」



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・会場参加の人やスタッフの人とも情報交換できて良かったです。
- ・オンラインのメリットや可能性、居場所や災害支援の想いを共有できて良かったです。
- ・参加できなかった他の分科会の情報も少し知れて良かったです。

企画・運営

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON〈樹恩〉NETWORK）【報告書】

犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）

紺野 功（特定非営利活動法人エンリッチ）

鈴木 正昭（りすこ〈おおた復興支援活動団体協議会〉）

榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

No.15 居心地のいい社会に向けて、政治も動かす共感力

開催目的

実は暮らしに身近な政治。選挙以外の政治参加とは？人を動かすために必要な共感力とは？

小学生が遊び場と子どもの意見の尊重を求めて区に提出した陳情、液体ミルクの開発を求めて電子署名を利用した事例から、自分たちにとって「居心地のいい社会・暮らし」の実現に向けて何ができるのかを考えます。

開催日時・方法

2月14日（日）10：00～12：00（オンライン&会場参加）

参加者数

28名（参加者21名：うちオンライン17名 会場4名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者

齋藤 博さん（東洋大学 ライフデザイン学部 人間環境デザイン学科 准教授）

末永 恵理さん（一般社団法人乳児液体ミルク研究会 代表）

神元 幸津江（子どもの遊び場 子ども会議）

内容・成果・課題

1 齋藤さんからのお話

齋藤さんからは、『重層する「制度」の境界を飛び越える』をテーマに話題提供があり、分科会のテーマの整理をしていただきました。「制度」とは、所謂、法律やルールといったものだけではなく、人々の価値観や意識、行動に影響を及ぼすもの、例えば、社会関係や社会行動のパターンといったものも含まれます。この「制度」の壁を乗り越えることが「政治参加」の意味の一つだということ、この壁を乗り越えるためには、「制度的能力（Institutional Capacity）」という考え方が有効だというお話がありました。これは、「知識の発展や循環のプロセス」「社会的ネットワーク」「価値の結合」を促進することにより、市民（や、その組織）が自身の居場所を見出し、自己実現を目指すという考え方で、政治の仕組みが求める意思決定プロセスの「正統性」ではなく、人々の生活の「正当性」に基づいた社会づくりへとつながるものです。また、人々の生活は千差万別であり、誰もが、さまざまな自己実現を目指す「各分野の多元的なリーダー」となり、例えば、社会的企業などの器を使いながら、重層する制度を超えたコミュニケーションや相互作用を生み出すことによって、「居心地のいい社会に向けた共感力」が創出されるのではないかと、イントロダクションいただきました。

2 事例報告

（1）乳児用液体ミルク開発へのオンライン署名とロビー展開について

末永さんは、ご自身の子育て中の経験から、海外で普及している乳児用液体ミルクが、なぜ日本になのか疑問に思い、2014年に電子署名（Change.org）で訴えました。1カ月で1万筆署名が集まったことから、困っている人が多いことを知り、その後の活動につながっていきます。

企業に働きかけながら自身もセミナーなどに参加する中で、仲間が増えていきます。また、状況を学ぶに従い、法整備の必要があることがわかり、関係省庁にも働きかけていきます。そんな中に起きた熊本地震で液体ミルクを求める声が急増、署名も一気に4万筆を超え、そこから政府との連携が進んでいったそうです。メディア取材も積極的に受け、法整備そして企業の商品開発につながりました。

心掛けていたこととして、関係するそれぞれの立場、事情を尊重すること。そしていちばん大変な人は声をあげられないので、周りの人がその分まで代弁していくことが大事、とのお話がありました。

また、電子署名により社会の潜在的な共感を呼び起こし可視化できたこと、政治を自分たちが暮らす社会の構成員同士の寄り合い、助け合いと思えば、身近にアプローチできるのではないかと、とのコメン

トもありました。

（２）小学生の陳情に関わり、学んだことについて

廃校になった小学校の校庭が、急に「ボール遊び禁止」となったことに怒っている小学生たちに出会ったことから、小学生と「子どもの遊び場 子ども会議」が始まりました。

会議の中では、ボール遊びをしたい子どもだけではないこと、安心・安全な遊び場として子どもたちはもちろん大人も含めて地域の人たちに「共感」されないと何も進まないこと、困っている自分たち自身が動くことが大切であることを伝え、実際に子どもたち自身が近隣の公園や施設に出向き、遊ぶ当事者の視点で調査を行っていきました。その中で、疑問や改善できそうな点が見えてきました。

そして、地域の共感を得るために行った活動報告会の場で、子どもたち自身が「陳情」を宣言します。そこから陳情について子どもたちと一緒に学び、子どもたち自身が５つの陳情項目を決め、自分たちで準備していきました。陳情は、区政/市政への市民参加として常にかかれており、子どもたちも自分たちの想いを伝え、議員がしっかりと議論してくれたことに対して非常に喜んでいました。最終的に５項目すべて採択されましたが、それらがどのように議論され、どう実現されるかまで追いかけることも必要です。

３ まとめ（成果と課題）

参加者のみなさんから、個人レベルのつきあいになった時に物事が進む、コーディネーションが重要という意見や地道な継続が必要になるとの意見がありました。

最後に、神元からは当事者をしっかり入れて、多くの人たちで話す場を作ること、今後も子どもたちが安心して意見を言える場を作っていくことをお伝えしました。末永さんからは、政治というのは社会の総意であることから、多くの人が他の人の困りごとを“自分事”として捉えることで、居心地のいい社会になっていくのではないかと、との言葉がありました。齋藤さんからは、新たな摩擦や抵抗が生まれるので手間や面倒が増えますが、安定している良くない状態を積極的に不安定にすることが居心地のいい社会を実現する第一歩になるのではないかとコメントいただきました。

身近な事例から、一步を踏み出すことがそれほど難しいことではないと理解いただけたのではないのでしょうか。居心地のいい社会に向けて、一人ひとりが、もっと政治も含めてできることを考える社会になっていけば、と思っています。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・地域の担い手として、誰でもリーダーになれると思いますし、なるべきと考えます。
- ・人を動かすための共感力。日常の地域の中での困りごとを自分のこととして考えてみる。変えてほしいことは自分で声をあげてみる。居心地のいい社会は自分たちで自分たちのこととして考えてみる。
- ・「今ある安定した制度を一旦不安定にして、よりよい安定した制度にしていくのが市民活動であり、まちづくりである」ということや「みんなが自分事として捉えやすい地域に」というところが、特に印象的です。

企画・運営

神元 幸津江（認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）【主担当・報告書】

上田 英司（日本 NPO センター）

No.16 LINE でできる地域活性化

～自動応答サービス（LINE Bot）を活用して、はじめの一步を踏み出そう！～

開催目的

現代の生活には、ICT 技術が欠かせません。防災・子育て・地域の魅力化・コロナウイルスなど、私たちの生活に役立つさまざまなアプリが作られ、使われています。その制作現場は、遠い世界のように、実は近い世界でもあります。どのような人たちが関わっているのでしょうか？

ICT は何か難しくて、プログラミングもわからないし、自分が入る余地はない…？いえいえ、技術がなくても大切な役割があります。本分科会では、参加者全員で、LINE で使えるチャットボット（LINE Bot）のプロトタイプを作りました。情報技術を身近に感じ、ちょっと取り入れ、新しいつながり、地域の活性化などのヒントが得られるのではと考え、分科会を企画しました。

開催日時・方法

2月14日（日）10：00～12：00（会場参加のみ）

参加者数

17名（参加者8名、出演者1名、スタッフ7名、ボランティア1名）

出演者

榎本 真美さん（Code for CAT）

日本におけるシビックテックの黎明期から活動に従事しています。待機児童の問題や、「地域猫」など東京での悩ましい課題に取り組むため、仲間と Code for Tokyo や Code for CAT を立ち上げて活動しています。

内容・成果・課題

1 榎本さんのお話 — 今回のワークショップ（チャットボット作り）の基礎知識 —

（1）チャットボットってなに？

チャットボットは、あたかも人間のように返答してくれるロボット（Bot）のことです。例えば、横浜市の「ごみの分別 AI」やヤマト運輸の例など、さまざまなシーンで使えます。

（2）プロトタイプ・プロトタイピングってなに？

本分科会では、完成度の高いものではなく、プロトタイプ（試作品）を作ります。プロトタイプを作るねらいは、一人ひとりのアイデアを素早く可視化することです。可視化することにより、別のアイデアや新しいアイデアに触れたり、失敗に早く気が付いたり、目指す姿が明確になったりします。まずは、難しく考えず、手を動かしながら進めていきました。

2 【ワークショップ】ライタソンの手法で、チャットボットを作る！

テーマ「ボランティア初心者さんの『よくある質問』に答える LINE Bot を作る」

ライタソンとは、「Write（書く）」＋「Marathon（マラソン）」の造語です。みんなの知識や知恵をどんどん書いて集めて、データとして整理して、サービスをプロトタイピング（試作）するワークショップを指します。ライタソンには、サービスを利用するユーザーなどさまざまな人が協働して作成することができる特徴があります。

LINE Bot は、人間のように返答してくれるロボットですので、質問と回答が1対1になるとわかりやすくなります。

（1）まず、ボランティアに関する質問を書き出します。1枚の青い付箋に1つの質問を記入し、付箋をA4の紙に貼ります。

（2）次に各グループでの自己紹介をします。お名前と普段されていること、「あるあるだね」と思って書いた質問の紹介をします。

（3）青い付箋を貼ったA4の用紙を隣の人に回します。隣の方は、青い付箋に書かれた質問への回答を赤い付箋に書き、A4用紙に貼り付けます。回答が思い浮かばない場合は、その質問について、別の言い方をした質問を書きます。これを繰り返すと、回答が埋まってきます。

（4）質問と回答の組がそろってきたら、参加者全員で Google フォームを活用して、入力します。



(5) 質問と回答の一覧（今回は 94 個の組ができました）ができたところで、Microsoft Azure というサービスの中の QnAMaker 内の knowledge base に読み込ませて、学習させます。その後、Azure Cognitive Services と連携させ、最後に LINE のアカウントと紐づけます。

(6) LINE のアカウントの QR コードを読み取り、各自、動作の確認をします。自分が入力した質問と回答が表示されるかドキドキしながらの確認です。

3 榎本さんのお話 シビックテックとはー

市民自身が、地域の現状や課題を知り、世の中のデータを活用・分析し、テクノロジーや ICT の力で、地域の「困った」を解決したり「魅力」を高めようとする活動を「シビックテック」と言います。シビックテックに取り組む人は、「ともに考え、ともにつくる」を念頭に活動しています。シビックテックの団体は、「Code for OO」と名乗って活動しており、世界中あちこちにあります。自ら、自分の地域をより良くしていくために、課題を共有したり、解決方法を探りながら活動しています。

4 成果と課題

(1) 成果

テクノロジーや AI を活用した取り組み（例えばチャットボット）は技術者のみでも利用者のみでも作成できません。さまざまな立場の人が協働することで実現できます。

今回の分科会で、テクノロジーと上手に付き合う面白さや、新しい人とのつながりや地域活性化につながる可能性などを感じることができました。ワークショップを通して改めて人のつながりの大切さを見直すことができました。また、考え込む前に手を動かす大切さなどのお話が聞けました。さらに、デジタル・アナログのそれぞれの良さを理解し、状況に応じて活用する大切さにも気づけました。

(2) 課題

チャットボットを実際に運用するとなると、回答の信頼性、サービス構築や運用のコスト、サービスの周知方法、いかに友達登録してもらうのかなど、さまざまな面から検討し、動く必要があることもわかりました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・実際に LINE Bot が出来上がるのを体験できワクワクしました。テクノロジーを上手く活用すると世界が広がりますね。さまざまな分野の得意としている方たちと、つながりたいと思いました。
- ・プロトタイプをはじめとして、とにかくやってみて、そこからいろいろな人にも関わってもらいながら高めていくことが大切、最初から完璧を求めずいろいろチャレンジしたい。

企画・運営

藤田 豊（東京都立新宿山吹高等学校）【主担当・報告書】

水田 征吾（ちょうふチャリティワーク）【副担当】

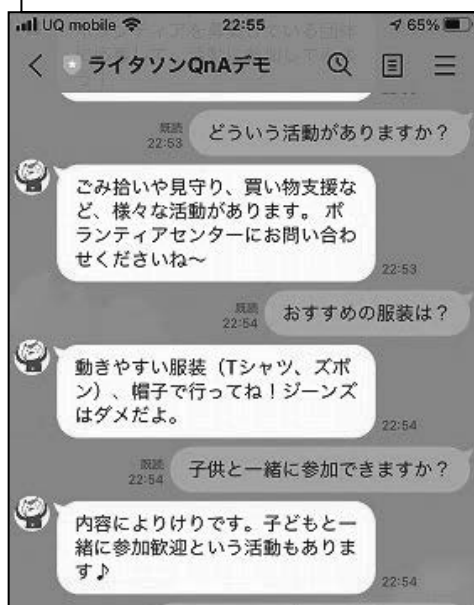
芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）

熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）



LINE アカウントの QR コードを読み込み、動作確認をします！



完成したチャットボット（LINE Bot）のプロトタイプ。入力されたさまざまな質問に、参加者が考えた回答の中から、AI が最適な回答を選択し表示される。

No.17 障害を持つということ ～ヒューマンライブラリーの手法で学ぶ～

開催目的

障害を持つということに対して、当事者がどのように思っているか、考えたことはありますか？今回当分科会を企画した寺山・黒岩は、それぞれ障害を持った当事者です。日常で周囲からさまざまな形で支援を受ける側だからこそ、身体、精神など、それぞれの障害自体だけではなく、その障害を持った当事者の人生、想い、障害に向き合う気持ちを伝える場を提供できればと思い開催しました。

開催日時・方法

2月14日（日）10：00～12：00（オンライン参加のみ）

参加者数

19名（参加者9名、出演者4名、スタッフ5名、ボランティア1名）

出演者

今村 彩子さん（「友達やめた」映画監督／聴覚障害の方）

アスペルガー症候群当事者の方

福地 健太郎さん（JICA 勤務／視覚障害の方）

Yummy（スタンドアップフォーマルチカラズ 代表／発達障害当事者）

内容・成果・課題

1 ヒューマンライブラリーについて

はじめに、ヒューマンライブラリーとは、デンマークが発祥の障害者や社会的マイノリティを抱える人に対する偏見を減らし、相互理解を深めることを目的とした試みです。人が、「生きた本」として、「読者（参加者）」に生きにくさを含めた自己開示を語るものです。そのような企画の性質上、出演者、参加者の個人情報への配慮が必要ですので、本報告書にすべてを掲載することはできませんが、概ね下記のような内容であったことをご報告したいと思います。

（1）今村 彩子さん（「友達やめた」映画監督／聴覚障害の方）

生まれつき耳がきこえない今村さんは、現在、映画監督をされています。今村さんが、どんなことを感じてきたかを中心に司書役のナビゲーターから質問を投げかけ、お話を伺いました。映画を作りたいと思ったきっかけ、アメリカで学んだこと、耳が聞こえないからいいねと言われてびっくりしたこと。どんなことを意識して映画を製作しているかをお聞きしました。

（2）アスペルガー症候群当事者の方

出演者は、今村彩子さんの映画、「友達やめた」にも出演しています。映画での葛藤、家族との関係、日頃感じていることを中心にお聞きしました。弟さんとの関係、両親との今までの歴史、周囲とのすれなどを話してもらい、アスペルガーという症状ではなく、出演者の人となりを見ていただけたのではないかと思います。

（3）福地 健太郎さん（JICA 勤務／視覚障害の方）

福地さんは、小児がんのため、目が見えなくなりました。小学生になる頃まで住んでいた自治体では、「目が見えない」ことを理由に盲学校への入学しかできないと判断され、大阪に転居しました。大阪では、小学校から高校まで普通校に通い、「障害があるから～」と考えることはなかったそうです。また、大学では1年間の海外留学も経験し、英語力も磨かれました。しかし、新卒としての就職活動は苦戦され、「障害がある」というだけで不合理な判断をされ、希望する職に挑戦ができないという経験もされたそうです。障害というのは本当はどこにあるのか、みんなが活躍できる社会について考えさせられるお話でした。

（４）Yummy（スタンドアップフォーマルチカラーズ 代表／発達障害当事者）

Yummyさんは、大人になってから発達障害の診断を受けました。子ども時代を振り返ると、障害特性が出ており周囲から排除され、つらい日々を過ごしました。高校時代に友人ができたことで、初めて人として扱われたと感じ、以降大学でも積極的に過ごすことができたそうです。しかし、仕事を始めると、人と話すことやプレゼンは得意にもかかわらず、障害特性からそこに至るまでの見通しが立てられなかったり、簡単な事務作業もミスの連続で怒られ、仕事が続かないこともありました。最近では、児童館で周りの方々の助けを借りながら仕事を続け、努力ではどうにもならない発達障害のことを理解してもらうため「スタンドアップフォーマルチカラーズ」を立ち上げて活動されているそうです。【筆者：司書役 榎本】

２ 成果・課題

（１）企画者寺山より（発達障害当事者）

働き、金銭を得るということは、誰にとっても大変なことです。まして、障害を持つ私たちにとっては、就労すること自体がハードルが高く、自分自身が希望しており、さらに適性のあると考えられる職を得ることはかなり実現が難しいことです。けれど、私は願います。誰もが障害の特性に合理的配慮をされた上で、自身の能力を生かせるような仕事を得ることがよりかないやすい日本社会が実現される日が来ることを。そのためには、今回の分科会の参加者の方々が得てくださった小さな気づきを集めて、大きな声にしていく必要があります。このフォーラムでの活動を通して、小さな名もなき声が大きな社会変革のうねりの穂先となるような手助けがしたいと思います。そしてまた、どこかで多様な形でヒューマンライブラリーが実施できたらと思っています。

（２）企画者黒岩より（アスペルガー症候群の当事者）

今回のヒューマンライブラリーの登壇者は社会参加も仕事もしていたので、まだ参加者の人からは違和感なく見れたと思います。

少しずつ少しずつ、マイノリティを知ってもらう。すり合わせを少しずつ少しずつしていき、さまざまな人が生きやすくなる社会につながればいいなと思っています。

（３）アンケートの結果から

アンケート結果から、参加された方の背景は、企業の方、社会福祉関係の方、支援組織の方、当事者の方など多様性に富んでいましたが、概ね参加したことで「障害を持った方が働きやすい環境を作れるように工夫してみよう」「障害を持った人一人ひとりを見ていこう」といった思いを持たれた方がいらしたことがわかりました。その点でいえば、当初の狙いであった「障害を持った当事者の人生、想い、障害に向き合う気持ちを伝えたい」という目的は、達成できたのではと考えています。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・一人ひとり感性や障害の特徴、置かれている環境等は違うので、その人その人をしっかり知っていかうと思いました。全ての人が平等にチャレンジしやすく暮らしやすい社会にしていきたいと感じました。
- ・本日の学びをもとに、今後も多くの方がイキイキと暮らしていける社会になるにはどうしたら良いかを考えていきたいと思っています。
- ・今まで知らなかった大人の発達障害の症状・当事者の苦勞を知り、今後、就業における企業側の整備が必要と強く感じました。

企画・運営

寺山 夢沙（スタンドアップフォーマルチカラーズ）【主担当・報告書】

黒岩 堅（東京 WRAP）【副担当・報告書】

榎本 朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

No.18 ボランティアと有償活動を知る

開催目的

80年代から始まった「有償ボランティア」と称された有償サービス。安価な労働なのではないかという問題提起の一方で、そのサービスを必要としている人や活動者がいます。なぜ“ボランティア”と冠する必要があったのか。その背景を知り、今後のボランティア活動との関係性を共に考えることを目的とした場です。

開催日時

2月14日（日）13：30～15：30

参加者数

37名（参加者30名：うちオンライン20名 会場10名、出演者2名、スタッフ5名）

出演者

小野 晶子さん（独立行政法人労働政策研究・研修機構 研究員）
枝見 太朗さん（一般財団法人富士福祉事業団）



内容・成果・課題

1【内容】

参加者の思う、所謂「有償ボランティア」（以降「有償Vo」）について、現状の認識における課題点を共有しました。参加者からは課題として「有償活動との境目がわからない」「本来あるべき給与の低下を招くのではないか」「無償にこだわるあまりボランティアの機会が失われるのではないか」などの意見が寄せられました。この課題点を含め、ゲストの小野さんが研究から導き出した問題点を中心に話を伺いました。※時間の関係で質疑は割愛しました。

2【成果】

80年代以降、長く議論されていた「有償Vo」などについて、出演者のお話から以下のように整理をしました。

（1）ボランティアにおける複合的な動機

（内発的動機、利己的動機、利他的動機）

- ① ボランティアにとって内発的な動機付けが最重要課題となってきます。労働者においてもインセンティブに基づかない内発的動機が重要であると、60年前にはすでに言われ始めています。
- ② 利己的な動機は自身が満たされるかであり、インセンティブなものも含まれます。
- ③ 利他的な動機は、誰かのために役立ちたいという気持ちですが、デメリットとして、自分以外の誰かによって解決される見込みがあると、「誰かがやる」と思い、関心が薄れてしまいます。

（2）有償Voの背景

80年代に介護福祉の現場で使われ始め、有償部分の解釈は「助け合い活動」という互酬と解釈され普及していきました。90年代に入って高齢化が進む中、旧厚生省も住民参加型在宅福祉サービスについて「助け合いの精神に基づき受け手と担い手が対等な関係を保ちながら謝意や経費を認め合うことは、ボランティアの本質から外れない」とし、「有償Vo」を容認しています。互酬性の形態は多様で解釈は難しいですが、物や労働と金銭を1対1で交換する形態と異なり、例えば村落の茅葺屋根の葺き替えを村民が年月を超えて互いに修繕し合うなど、益を受けた相手以外に益を返したり、期を経て返すのが互酬といえるでしょう。

（３）有償Vo近年の動き

2000年代に入ると「流山裁判」という有償ボランティアの事業が争点となった裁判が開かれました。この裁判は税法上の裁判ですが、発端となった事業が収益事業か否かという中で、ボランティアの労働者性が副次的に問われました。結果はボランティアの労働者性に白黒をはっきりさせないものとなりましたが、裁判では収益事業ということで原告の請求は棄却されました。この裁判以降は各団体が有償Voに支払う賃金に配慮するようになり、最低賃金を上回るような支払いをする団体も出始めました。また、2021年に高齢者雇用安定法が改正されます。70歳まで定年の引き上げ、または定年制の廃止を促進するためのものです。しかし、企業側の雇用が難しい場合は「事業主が委託、出資（資金提供）等する団体が行う社会貢献事業」、つまりNPOへ従事する措置を講ずるという選択があります。

3【課題】

（１）有償Voの今後

前述した高齢者雇用安定法の改定について、企業がNPOに資金提供した金額の中で高齢者に謝礼を支払うというスキームが生まれる可能性が考えられます。

また、ボランティア先進国といわれているイギリス

では、全人口の26%がボランティアをしています。その一方で、ボランティアの労働者性を問う裁判も起きていて、近年かなり判例が多くなってきています。判例が多くなっていることを踏まえイギリスでは、ボランティアと団体との合意形成を重視しているそうです。日本でも2006年から労働審判の運用が開始され、年間3,500件前後（2016年までの統計で）が開かれています。ただし非公開ですので、実際にどのような内容かは知る術はないものの、その中でボランティアの労働者性を問う内容のものが起きている可能性は十分にあり、今後も起こる可能性はあるでしょう。



（２）ボランティアと有償サービスの関係性を考える

阪神・淡路大震災以降、ボランティアも社会の仕組みの1つになりつつあります。ボランティアの本質を保つためには、ボランティアをする人ではなくコーディネートをする人、もしくは受け入れる人たちのモラルにかかっていると思います。今回、有償Voの労働者性について結論に至りませんでした。が、コーディネートする人は、ボランティアの内発的動機を大切に、ボランティアとの合意形成が重要になってくると、ボランティア性と労働者性の双方向からの視点を持つ必要があることをこの報告を通して伝えたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ・わかるなあと思いながらも新たなもやもやが浮上するような楽しい会でした。
- ・互助型の生活支援サービスもありなのかなとも思いました。ただ、ボランティアとは定義づけられないのかなとも思いました。どういう社会を望むのかが問われるなとも思いました。

企画・運営

高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ／トライポッド）【主担当・報告書】

枝見 太郎（一般財団法人富士福祉事業団）

No.19 新しいボランティアのカタチ～活動の輪を広げる～

開催目的

新型コロナウイルス感染症拡大により、対面型活動が困難な状況に追い込まれています。そのような中でも、オンラインや間接的支援など、さまざまな創意工夫で活動を継続している団体もあります。私たちはこれを「新しいボランティアの形」と捉え、コロナ後にも広がっていくと考え、新しいボランティアを知り、語り、生み出す機会となることを願い、分科会を開催しました。

開催日時・方法

2月14日（日）13：30～15：30（オンライン参加のみ）

参加者数

29名（参加者22名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者

鈴木 祐司さん（荒川区社会福祉協議会 地域ネットワーク課 荒川ボランティアセンター）

堤 彩さん（日野市社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター）

釜島 豪顕さん（社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑）

内容・成果・課題

1 内容

本分科会では、3人の登壇者が所属する団体・施設で取り組んできた、コロナ禍でのボランティア活動について話してもらいました。

まず、鈴木さんの団体では、例年夏に行っていた夏体験ボランティアの代わりに、「おうちDEボランティア」を実施しました。その中では、受け入れ協力をしてもらっている団体からアイデアをもらい、マスクや防護服を作成し、送付しました。また、子どもたちが特技を披露している動画を撮影する、パフォーマンスボランティアも実施しました。このように、イチからプログラムを作成するのではなく、これまでの取り組みの形を変えることが大切だという話をされました。

次に、堤さんにはZoom体験講座などについて話してもらいました。その中で、オンライン講座を実施することにより、オンラインに慣れていない方だけでなく、ボランティアを受け入れる施設側にもオンラインの土壌を作ることが可能になりました。このようにオンラインの土壌がないところでも、「種をまかないと、水をあげないと、芽は出ない」という言葉を基に取り組みを継続して行っていました。

最後に、釜島さんには高齢者施設における新しい形のボランティアについて、事例を話してもらいました。例えば、手作り作品の送付や、オンラインでの特技披露、話し相手などをしてもらったそうです。オンラインに慣れていないことが多い利用者に、ビデオ会議の説明を行ったり、ボランティアに具体的に作成物を依頼したりと、丁寧な対応を心がけていました。

その後、参加者はブレイクアウトルームに分かれ、「目指せ！非接触型ボランティア100連発」と題し、新しい形のボランティアのアイデアを出してもらいました。各グループからは、オンラインバスツアーや、勉強を教える動画、オンラインクッキング講座、紙のゴミ箱作りなど、さまざまなアイデアを出してもらいました。また、ボランティアと受け入れ団体において、ニーズを互いに言えるような人間関係を日頃から作ることが大切だという意見も出ました。

最後に登壇者の方々から、「コロナ禍で対面が難しくなったが、オンラインを使えばつながりを保つことができる」「オンラインができない方を含めて、取り残しがないようにしたい」などのコメントをいただきました。

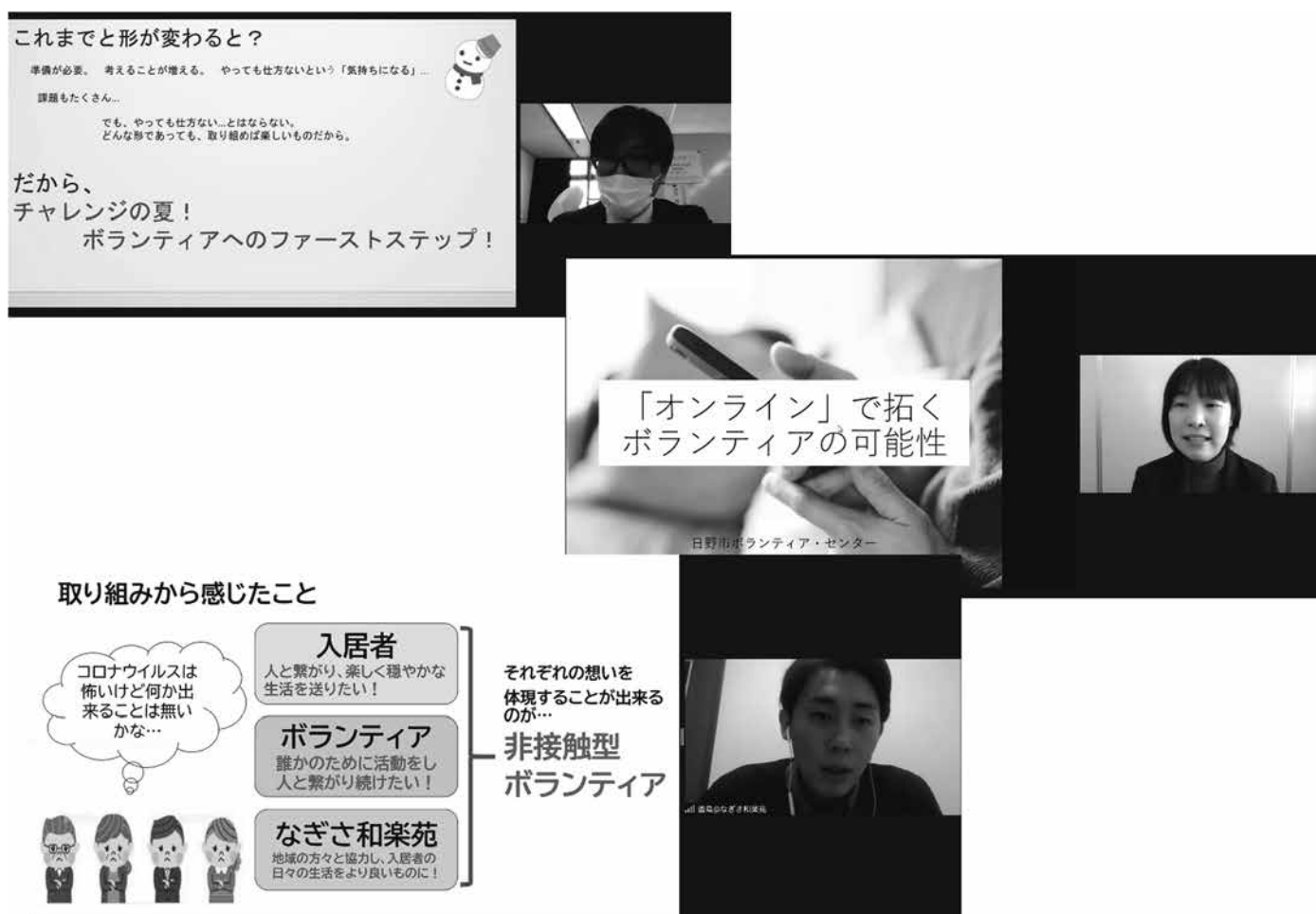
2 成果

本分科会によって、コロナ禍において延期や中止が多かったボランティア事業をいかに工夫して行うかについて議論できたと思います。特にオンラインの活用については、「設備がない」「オンラインに慣れていない人がいない」など、導入に消極的な地域もあったと思いますが、少ない人数で複数回取り組みを行うことや、関係者に丁寧に説明することにより、少しずつ基盤を作っていくことが望ましいと考えました。

また、各地域で行っていた工夫やアイデアについて、広く共有をすることにより、「真似をしてみよう」「もっと工夫しよう」というように、現状をポジティブに捉え直すきっかけを与えることができたと考えます。

3 課題

実際に、上記のような工夫を行うためには、多くの時間や継続的な取り組みが必要になると考えられます。それに伴う職員のマンパワーもこれまで以上に必要になるでしょう。そのため、いかに効率的に新しい形のボランティアを提供するかについてもさらに検討をする必要があると思われます。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・次年度実施予定の事業について、こんな風にやってみたいと想いはありながらも、これという題材にたどりつけずでしたが、自分たちでは思いつかなかったアイデアをいただきました。
- ・オンラインでできることの多さを感じました。これからは、さらに力を入れて、お家でできるボランティア、オンラインでできるボランティアを行っていきたいと思いました。
- ・オンラインでのボランティア活動は地域、世代を越えてつながっていく可能性があることがわかり、今後の活動が楽しみに感じました。

企画・運営

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】
芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【主担当】
水田 征吾（ちょうふチャリティーワーク）
藤田 豊（東京都立新宿山吹高等学校）

No.20 コロナに負けない！～これからの助成と活動のカタチ～

開催目的

新型コロナウイルスの感染拡大により、活動を縮小・変更した団体が少なくありません。活動資金を助成する団体も事業の中止・延期の他、オンライン対応など、厳しい状況の中でもボランティアグループやNPOを応援する方法を模索しています。

今回は、こうした状況における助成団体の取り組みを聴き、コロナ禍においても充実した活動を目指す団体と活動を応援する団体が、地域の活動を止めないようにそれぞれ行ってきた工夫や新たなアイデアを共有し、今後の活動に向けて意見を出し合うことを目的としました。

開催日時・方法

2月14日（日）13：30～15：30（オンライン参加のみ）

参加者数

30名（参加者22名、出演者5名、スタッフ3名）

出演者

進行 安藤 雄太さん（東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー）
発表者 山崎 正孝さん（中央労働金庫 総合企画部 CSR担当）
早川 雅人さん（公益財団法人ヤマト福祉財団 常務理事）
長谷部 敏朗さん（公益財団法人キューピーみらいたまご財団 事務局長）
市川 徹さん（一般財団法人世田谷コミュニティ財団 専務理事）
佐藤 新哉（東京ボランティア・市民活動センター ゆめ応援ファンド特別助成担当）

内容・成果・課題

1 各財団から

（1）山崎 正孝さん（中央労働金庫 総合企画部 CSR担当）

中央労働金庫（ろうきん）は、労働組合や生協など働く仲間がお互いを助け合うために資金を出し合っ

てつくった協同組織の金融機関で、新たな事業の立ち上げ等を応援する「“カナエルチカラ”～生きるたのしみ、働くよろこび～」の助成制度を実施しています。地域の課題解決や、人々の豊かな暮らしにつながる取り組みを応援する内容で、対象事業は多岐にわたります。

また、単年度だけでなく、中長期的なビジョンを持って活動いた

ただくことをねらいとして、最長3年間の継続助成も行っており、活動がさらにステップアップすることを目標としています。また、活動団体とのパートナーシップとして面談やフォローを行ってききましたが、コロナ禍においては、オンラインで面談を行い、好事例を他団体へ紹介する機会を持っています。加えて、コロナによる助成後の計画変更や助成期間の延長等にも柔軟に対応しました。

（2）早川 雅人さん（公益財団法人ヤマト福祉財団 常務理事）

ヤマト福祉財団は、障がいのある方々が「自立して生活できることで幸せを感じられる」ことを大切に捉えて活動してきました。主に、障がい者の給与増額に取り組む事業所・施設における増額の資金や障がいのある方の幸せにつながる事業・活動に対して助成を行っています。さらにコロナ禍の支援として、一般社団法人自然栽培パーティーの「ハレバレごはんプロジェクト」への助成があります。これは、ひとり親家庭や生活困窮世帯に畑仕事を手伝ってもらい、プロジェクトで収穫した野菜を使った食事の提供や、ひとり親世帯や医療従事者に弁当を届けたり、収穫した野菜と一緒に生産に携わった障がい者のメッセージ動画を医療従事者や子ども食堂がなくなって困っている子どもたちに届けたりする取り組みです。障がい者が医療従事者等に弁当を届けた際に直接感謝されるため、彼らの自信につながります。今後は障がい者もボランティアと一緒に社会貢献活動に参加することで、彼らが誇りを持てる活動が一層広がるように応援していきたいと考えています。

（3）長谷部 敏朗さん（公益財団法人キューピーみらいたまご財団 事務局長）

キューピーでは、「食育」と「子ども」を中心とした食育活動に取り組んできましたが、財団では「食育」と「食を通じた居場所づくり（子ども食堂）」の活動を支援しています。また、単年度でなく、3年程度の時間をかけた食育活動を、という要望に応じて、昨年から「食育3年継続助成」をスタートし、現在5団体に取り組んでいただいています。このように食支援の活動には状況の変化が見込まれるため、実状・状況に合わせた柔軟な対応を重視しています。他にも、財団主催の居場所づくりセミ



ナーを年2回開催し、また、全国の助成団体をお招きして、お互いに情報交換・交流できる助成授与式・交流会を実施し、活動を通じた悩みや感動を共有する機会を提供しています。コロナ禍の取り組みとして、弁当やフードパントリーへ活動を変更した子ども食堂への緊急助成を行いました。来年度もこの新型コロナ禍対応特別助成を行うとともに、中間支援団体による食料の物流体制構築への投資も新たに助成対象としました。さらに、食育助成事業の対象を乳児、胎児、妊産婦や産後の母親のケアに広げました。また、食品メーカーの財団として食品寄付支援も充実し、従業員が助成先の団体の活動に参加し、学ぶ体験を奨励すること等も今後の課題としています。

(4) 市川 徹さん(一般財団法人世田谷コミュニティ財団 専務理事)

2018年設立の都内初の民間運営によるコミュニティ財団として、東京・世田谷区を中心に活動しています。「まちを支える生態系をつくる」をミッションとして、今は「都市の農」をテーマにした助成プログラムと、伴走支援を中心にした事業指定プログラムを実施しています。さらに、コロナ禍の影響を受けた人々を支える団体を支援する「かけはし基金」を実施しました。これは、先に採択団体を選定してから伴走支援付きのクラウドファンディングで資金を集めるもので、取り組むテーマが決まっているため寄付しやすいこと、活動団体が直接呼びかけることで周囲とのつながりが増えるなどのメリットがあります。こうした取り組みから、地域の多様な活動の芽を発掘・育成することの重要性を感じています。また、資金としてだけではなく、伴走支援によるつながりから団体同士のさまざまな化学反応が生まれることが大切であり、活動団体と財団と一緒に寄付集めを行うことで共に世田谷のまちづくりを支える生態系をつくる仲間としての意識が芽生えることを感じました。

(5) 佐藤 新哉(東京ボランティア・市民活動センター ゆめ応援ファンド特別助成担当)

本センター事業の一つとして、これまでも草の根の市民活動の助成を行ってきましたが、コロナ禍で活動や運営に支障をきたしたり、事業の継続が難しくなったなどの声を受け、速やかに対応するため昨年6月に特別助成を行いました。新型コロナウイルスの影響で必要になったものを助成対象とし、助成額を1団体10万円以内とすることでより多くの団体が利用できるようにしました。申請書類や募集期間・選考・送金のスケジュールの簡略化・短縮化といった工夫をしました。申請から、活動するために必要な収入の減少、DVやひきこもりといった社会的な課題の増加や深刻化の他、集まらないことで人とのつながりが断たれているといった課題がうかがえました。

2 今後の活動と助成に向けた課題(発表者や参加者のクロストークから)

これまでも、地域や社会の課題をどのように解決するかという視点から新たな助成の仕組みがつくられてきました。今後も地域のさまざまな課題の解決に向けて、地域の団体に寄り添い、活動を育てるという視点に立ち、資金面で活動を支援することが、助成団体の姿勢としても大切になってくると思われます。また、複数の助成団体が成功事例を共有することで社会課題の解決に対応できる新たな取り組みが生まれることも考えられるため、今後は団体同士の連携協力が必要になると思われます。



参加者の声(アンケート結果などから)

- ・企業や財団の助成する際の想いや原資ができた際のいきさつなどをお聞きすることができて、改めて、そういう部分も大切にしながら、地域のNPOへつなげていきたいと思いました。
- ・各財団がそれぞれどのような想いで、どのように助成事業に取り組んでいるのか知ることができた貴重な機会となりました。また、地域に重点を置き、実施されている助成が、どのようにターゲットを設定して助成を実施しているのか知ることができてよかったです。
- ・助成金は単に地域活動を財源面から支援するだけでなく、活動者の声を拾い上げながら伴走支援をすることが大切だと気づきました。ファシリテーターの方が「このコロナ禍の経験を今後どう生かしていくかが大事だ」と言っていました。まさに今こそ助成の方法や内容を再精査し、活動者を本当に応援するためにはどう工夫すべきかを考え、今後に向けて実行しなければならないなと思いました。

企画・運営

色部 陽(東京ボランティア・市民活動センター)【主担当・報告書】

市川 徹(株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団)

熊谷 紀良(東京ボランティア・市民活動センター)

No.2 1 クロージング つながる力

開催目的

東日本大震災から10年が経とうとしています。この間、被災された人や地域を支えようと新たなつながりや連携が、全国で広がりました。一方、新型コロナウイルスにより、人と人とのつながりが失われることの危惧もあります。

私たち一人ひとりのつながる力を持ち寄り、孤立や分断を超えた新しいカタチが模索されます。クロージングでは、意思あるボランティアのチカラの価値と可能性について考えました。

開催日時・方法

2月14日(日) 16:30~18:00 (オンライン&会場参加)

参加者数

63名(参加者35名:うちオンライン29名 会場6名、出演者4名、スタッフ24名)

出演者

山崎 美貴子さん(東京ボランティア・市民活動センター 所長)

伊藤 聡さん(一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校)

永沼 悠斗さん(3・11メモリアルネットワーク 大川伝承の会
大川地区「記憶の街」模型復元プロジェクト実行委員)

渡邊 郁也さん(元ぐるぐるユニットメンバー)

内容・成果・課題

1 内容

本分科会では、震災以降、各被災地で活動が続けてきた方々の取り組みや想いを聞き、今後の困難を乗り越えるための示唆をもらいました。

まず、伊藤さんは岩手県釜石市を中心とした街づくりを行うと同時に、子どもたちが地域で活動できるようにするための取り組みを行ってきました。例えば、小学生が自由に活動する「放課後こども教室」や子どもたちを対象にした週末の野外の遊び場づくりである「あおぞらパーク」、高校生による伝承活動、ボランティアコーディネートなどを行ってきました。コロナ禍においては、活動が難しいこともありましたが、野外で安心・安全に子どもたちが遊べる場をつくるなど、継続的な取り組みをされています。

次に、永沼さんには被災者としての体験を伝える伝承活動について話してもらいました。被災した想いを伝える「大川伝承の会」の結成や、大川被災4地区の模型を作成し、地域住民を中心に記憶を書いた「記憶の旗」を立てる「失われた街」模型復元プロジェクト in 大川地区を実施しました。これらの活動は、「地域は自分の一部」であり、それが失われた後では遅いという気持ちから行っているそうです。

最後に、渡邊さんは前日の地震により登壇できませんでしたが、資料のみ共有しました。渡邊さんは、被災当時に感じた「情報の大切さ」や「故郷のことを知ってほしい」という想いがありました。そのため、町に関わる人へのインタビューや特産などを楽しく紹介する動画を展開しました。また、若者たちが町に関わるようなチームとして「ぐるぐるユニット」を結成し、震災以降バラバラになった若者同士をつなぐ役割を果たしてきました。

以上の話を受け、山崎さんは、活動の多様さや震災で失った家族、友人などを出発点として活動されていることについてコメントされました。

また、本分科会の中では「Voice from 3.11」より、被災された方々の想いを共有しました。

その後のグループディスカッションでは、参加者によるさまざまな意見が出ました。例えば、被災者や支援する人において、各世代をいかにしてつなぐかが重要であること、現在はコロナ禍で活動が難しいが、オンラインなどを活用して現場を見ることが必要といった意見が出ました。

2 成果・課題

被災者や当事者でなくては知り得ないような思いや取り組みを広く共有できたと思います。その中で、地域でのつながりを保つことや、今後起こりうる困難に対して普段から備えておくことの重要性を知ることができました。これはコロナ禍である現在でも求められる視点であり、その示唆を頂いたと考えます。

その上で、被災者にどのように寄り添うことが良いのか、彼らのために何ができるかについて、今後、さらに議論していきたいと考えました。



参加者の声（アンケート結果などから）

- ・震災を直接体験した方の講演は、やはりリアルで説得力があります。
- ・登壇者のお話は心に刺さるものでした。防災のボランティアもしていますが、当事者の話に勝るものはないと思いました。
- ・オンラインなどのアイデアを生かし、新たなボランティアの形式をつくる。これがまた新たなつながる力になると思いました。

企画・運営

神元 幸津江（認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）

上田 英司（日本 NPO センター）

水田 征吾（ちょうふチャリティーワーク）

五十嵐 豪（特定非営利活動法人 CWS Japan）

小林 理人（青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター）【報告書】

No.22 ふれあい満点市場 ～NPO・NGO の作品展示販売～

開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普段なにげなく使っている物を作っている方を知っていますか。区境ホールで開催したふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しました。作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物をしながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことをぜひ聞いてみていただければと思います企画しました。

開催日時

2月13日（土）11：00～15：00

2月14日（日）11：00～15：00

参加者数

4団体・38名

【1日目】参加団体スタッフ4名、実行委員会スタッフ6名、ボランティア2名、TVACスタッフ8名（計20名）

【2日目】参加団体スタッフ5名、実行委員会スタッフ4名、TVACスタッフ9名（計18名）

＜参加団体名＞オレンジライン／東京カリタスの家／東京都青年団体連合／
東京ボランティア・市民活動センター

内容・成果・課題

「ふれあい満点市場」は、東京ボランティア・市民活動センター（セントラルプラザ10階）に常設されている福祉作業所やボランティアグループ、国際協力団体等の物品を委託販売するスペースです。顔と顔を合わせて「ふれあう」ことを大切にしたいという想いをこめて名づけられました。

ボランティアフォーラムでの出展会場は、セントラルプラザ1階の区境ホールというオープンスペースでした。新型コロナウイルス感染拡大の折、緊急事態宣言下での開催となりましたが、作り手の顔が見え、想いが直接伝わるように、活動に関わる団体の方々や作品を作っている方々と一緒に出展販売を行いました。参加団体が少ないことを逆にとり、買い物にいらした方や単に通る方も気軽に立ち寄っていただけるような、ゆったりとした雰囲気を作りました。

東京ボランティア・市民活動センターの出展ブースでは、例年はセンターが出版している書籍や「ぼらせん」（煎餅）のみの販売ですが、今年度は震災に関する商品をまとめたミニコーナーも設け、出展を見送られた団体さんの商品を一部、代わりに販売する形を取りました。今年の3月は東日本大震災から10年という節目にあたり、さまざまな団体と「Voice from 3.11～私たちの思いと願い～」



(<https://voicefrom311.net/>)として、みなさんからのことばを集めており、センター10階の常設販売スペースでも東日本大震災に関する書籍や支援団体の商品を集めた特設コーナーを設けています。2月13日(土)深夜、東日本大震災の余震と思われる地震が福島県沖で発生した矢先でもあり、東日本大震災を思い出して、足を止めてくださる方々もいました。

また、今年度は、例年までと異なり、購入いただく方と参加団体の方との間に飛沫防止用ビニールカーテンを置き、消毒用アルコール除菌液も設置しながら開催しました。感染予防を徹底するため、積極的にチラシを手渡ししたりはできませんでしたが、団体の方は来店者に商品や活動について丁寧に伝えていらっしゃいました。人通りは少なかったものの、例年にない売上げだったとの声が届きました。悩みながら緊急事態宣言下での出展を決断してくださった参加団体の方が、笑顔でお帰りになる様子を見て嬉しく思いました。また、今年度は参加を見送られた団体の方も、ボランティアフォーラムの盛会を応援するコメントを送ってくださったりするなど、毎年開催してきたことで、つながりが強くなっていることを感じました。



企画・運営

田中 貴子(東京ボランティア・市民活動センター)【主担当・報告書】

品田 明恵(東京ボランティア・市民活動センター)

No.23 情報誌『ネットワーク』表紙原画展

開催目的

東京ボランティア・市民活動センターが発行している市民活動情報誌『ネットワーク』（隔月刊・7,000部発行）の表紙原画展を今回も開催しました。

2016 年度よりフローラル信子さんに描いていただいている表紙は読者の方々にとっても好評で、せっかくだから多くの方に観ていただきたい、という想いから毎年展示をさせていただいています。今では、ボランティアフォーラムにおけるフリースペースでの「オープンカフェ」とのタイアップ企画として“定番”になりました。今年度は、感染拡大防止の関係上、カフェの開催をすることができませんでしたが、来訪される参加者の方や実行委員・ボランティアの方々に、癒しの空間になればと今回も開催を決めました。

イラストに込められたフローラル信子さんの想い、イラスト送付の際にちょこっと添えてくださる可愛らしい絵たち、そして、印刷ではどうしても出せない原画の色や風合いを感じていただけたら…と考えて企画しました。

開催日時

2月12日（金）～14日（日）

参加者数

ボランティアフォーラム参加者の皆さん、実行委員、ボランティアスタッフ
東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さん

出演者

フローラル信子さん（イラストレーター）



内容・成果・課題

今回は、2020年度の『ネットワーク』の表紙イラストをメインに掲示しました。そのほか、表紙のラフや本誌の新企画「市民活動用語のキソチシキ」のイラスト、編集担当宛にいただいた年賀状なども一緒に展示しました。今年度の表紙は、新型コロナウイルスの影響下での市民活動を感じさせるイラストや、“つながり・ささえあい・つむぎあい”といったキーワードを意識されたイラストがメインになったように感じます。

少しでも目に留まるようにと、飾りが得意なスタッフにも協力を仰ぎ、ガーランド風の飾りを作成して、動きのある展示にしてみました。しかし、残念ながら今回は、みんなが集えるオープンカフェは開催することができず、来訪される参加者の方も少なかったため、多くの方の目に触れることはかないませんでした。一方で、人数は少ないながらも、足を止めてじっくり見てくださる方々がいました。

また、オンライン参加の方に向けてSNSを使って発信したり、フォーラム後も当センターの利用者の方に向けて2月いっぱいまで掲示しました。



参加者の声（アンケート結果などから）

来所される方はどなたも観ることができる特別企画なので、アンケートはとっていませんが、イラストを眺めている方に話しかけたところ、以下のようなコメントをいただきました。「今年も、フローラルさんのイラストを見ることができてうれしいです。情報誌『ネットワーク』も、発行を止めないで続けているっていいことですね！」「趣味でイラストを描いているのですが、色の使い方や構図など勉強になります」「癒されるね～。好みなんですよ、こういうイラスト」

企画・運営

秋池 智子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告者】

佐藤 新哉（東京ボランティア・市民活動センター）

山口 いさえ（東京ボランティア・市民活動センター）

朝比奈 ゆり（東京ボランティア・市民活動センター）

相澤 若葉（東京ボランティア・市民活動センター）

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO

開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップ NPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランティアズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランティアズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランティアズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランティアズム
10	2014	「気づく・築く 市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランティアズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランティアズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと出合いをもっと」	社会・しくみ、コミュニティ、参加のかたち、生き方・はたらき方
15	2019	「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」	参加・人の力、ダイバーシティ、カタチ、時代・未来
16	2020	「今こそ動こう！イロドリある未来へ～」	今見えていること（社会課題）、未来の課題・未来に向けて今すべきこと、ボランティアな動き
17	2021	「つながるチカラ 新しいカタチ」	地域・居場所など、障害理解・当事者など、ボランティア、新しい取り組みなど

*2012年は「第20回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2021 実行委員会名簿

	氏 名	所 属 団 体
1	芦澤 弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター
2	五十嵐 豪	特定非営利活動法人CWS Japan
3	市川 徹	株式会社世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団
4	犬塚 尚樹	NPO法人ふれあいの家 おばちゃんち
5	上田 英司	日本NPOセンター
6	枝見 太朗	一般財団法人富士福祉事業団
7	鹿住 貴之	認定NPO法人JUON〈樹恩〉NETWORK
8	神元 幸津江	認定NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOD）
9	黒岩 堅	東京WRAP
10	小林 理人	青梅市社会福祉協議会 青梅ボランティア・市民活動センター
11	紺野 功	特定非営利活動法人エンリッチ
12	鈴木 正昭	りすこ（おおた復興支援活動団体協議会）
13	高橋 義博	府中市市民活動センター プラッツ／トライポッド
14	寺山 夢沙	スタンドアップフォーマルチカラーズ
15	成田 早紀	荒川区社会福祉協議会 荒川ボランティアセンター
16	藤田 豊	東京都立新宿山吹高等学校
17	水田 征吾	ちょうふチャリティーウォーク
18	村瀬 つむぎ	NPO法人グッド
19	山田 翔太	一般財団法人世田谷トラストまちづくり

●事務局

	長谷部 俊介	東京ボランティア・市民活動センター
	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター
	榎本 朝美	東京ボランティア・市民活動センター
	色部 陽	東京ボランティア・市民活動センター
	相澤 若葉	東京ボランティア・市民活動センター
	村上 カヤ	東京ボランティア・市民活動センター

■協賛・協力

< 特 別 協 賛 >

株式会社ガイア

株式会社三菱 UFJ 銀行

< 協 賛 >

NEC ネットエスアイ株式会社

NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

公益財団法人 SOMPO 環境財団

公益財団法人 SOMPO 福祉財団

公益財団法人日本社会福祉弘済会

公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団

社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団

東京都生活協同組合連合会

トヨタ自動車株式会社

< 協 力 >

社会福祉法人清水基金

生活協同組合パルシステム東京

中央労働金庫

モンデリーズ・ジャパン株式会社

< 事 業 協 力 >

TOOS CORPORATION

(50 音順・敬称略)

❀ボランティアでご協力いただいたみなさま❀

Ⅴフォーラム実施にあたっては、
のべ 16 名のボランティアの方にご協力いただきました。
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、当日の案内や消毒などの整備、
分科会の運営など、さまざまな場面で支えていただきました。
ボランティアのみなさまのおかげで、
無事に全日程を終了することができました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

また、今年度はコロナ禍での開催ということで、
ボランティアの参加を見送った方もいらっしゃるのではないかと思います。
また次回、Ⅴフォーラムでお待ちしております。

ボランティアフォーラムにご協力いただいたみなさま

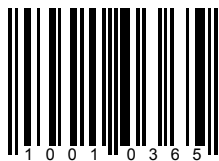
Vフォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の全体や分科会の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま、
企画・運営に携わった実行委員のみなさま、
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思います。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2021

報 告 書

〈発 行〉 市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO 2021 実行委員会
事務局 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171 / FAX 03-3235-0050
<http://www.tvac.or.jp>

〈発行年月〉 2021 年 3 月



(センター管理用)

ISBN978-4-909393-35-7

C2036 ¥1000E

市民社会をつくる

ボランティアフォーラム TOKYO2021 報告書

定価： 1,100 円 (1,000 + 税)

東京ボランティア・市民活動センター



9784944014354



1922036010008

